秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要　第44号別冊

附　属　特　別　支　援　学　校

令和３年度

研究紀要

第 48 集

新しい時代で学び続ける児童生徒を育てる

～学びの積み重ねの実践とゆるやかなネットワークの構築～

巻　頭　言……校長　藤井　慶博

第１章　研究の概要…… 1

第２章　ワーキンググループによる研究

Ⅰ　授業づくりワーキンググループ…… 3

Ⅱ　オリジナルマップ活用推進ワーキンググループ…… 9

Ⅲ　地域とつながるワーキンググループ …… 15

第３章　授業づくりの実際

Ⅰ　小学部の授業づくり……21

Ⅱ　中学部の授業づくり……23

Ⅲ　高等部の授業づくり……25

第４章　研究のまとめ

1　児童生徒一人一人の「生涯学習力」の高まりに向けて……27

2　成果と今後に向けて

3　夏のセミナー・公開研究協議会の記録……29

あ　と　が　き……副校長　松井　智子

研　究　同　人

研究紀要発刊にあたって

校長　藤井慶博

今年度から「新しい時代で学び続ける児童生徒を育てる　～学びの積み重ねの実践とゆるやかなネットワークの構築～」というテーマを設定して研究を進めてきました。平成 31 年度からはじめた「児童生徒の生涯学習力を高める教育課程の編成」というテーマに引き続き，児童生徒の生涯学習の充実をテーマに据えて３年目ということになります。

令和の時代とともに，世界は，新型コロナウイルス感染症といった未曾有の危機に瀕し，Face to Faceの付き合いや元気な挨拶，会話を楽しみながらの食事など，これまで推奨されてきた生活様式の大幅な見直しを余儀なくされました。実体験や，人や物との直接的な関わりを基盤に学習が進められてきた特別支援学校の児童生徒にとっても，多くの困難に直面したと言わざるを得ません。

一方，国のGIGAスクール構想の加速化などにより，児童生徒の学びを支えるツールを得ることもできました。とりわけ本校では，５年ほど前から，タブレット端末を配布し，学習活動に活用するなどの取組がコロナ禍において功を奏しています。

コロナ禍は，予測困難でかつ刻々と状況が変化する社会において，たくましく生き抜くため，自ら課題を見出し，課題解決のためにどのようにアプローチが必要なのかを考え，実行し，評価していく力が試された試金石であるような気がしてなりません。

さて，研究は，「生涯学習力を高めるための授業づくり」という学部ごとのグループと，地域社会とのつながりを模索する学部縦割りのワーキンググループといった縦断的・横断的な体制で進めてきました。また，研究成果を報告する機会として，「夏のセミナー」と「公開研究協議会」を開催しました。いずれも校外の参加者や研究協力者の皆様から，多くの御指導・御助言をいただくことができました。以下，御助言の一部を紹介いたします。

・子どもがそれぞれ「ヒト・モノ・コト」を通して活動を楽しんでいる瞬間を教員がしっかりキャッチして，子どもに実感できる形でフィードバックしてあげる，その繰り返しが「明日もエンジョイタイムしたい！」につながると思う。

・様々な体験や学びを，次の学びに生かすためのデータベース化（メモ，日記など）が大切であり，ICT 機器がそのための有用なツールになる。ICT 機器は，子どもたちにとって生涯のパートナー，困ったときに助けてくれる，スタンド・バイ・ミーな存在になるのではないか。

・特別支援学校在学中から卒業後の「学び」を見据えた実践には非常に価値があり，本研究は社会を変える大きな可能性がある。

また，私見ではありますが，本研究を通して，教員の成長にも大きな影響をもたらしたものと考えられます。児童生徒の生涯にわたる学びの充実を模索する中で，私自身，自らの生き方・在り方に思いを馳せることができました。他の教員も同様の思いで研究に取り組んだものと考えられます。子どもにとって必要な力は，大人にとっても必要な力なのかもしれません。

末尾になりますが，本研究に御協力いただきました講演講師の先生方，研究協力者の皆様，秋田県教育委員会，秋田大学をはじめ，多くの方々に深謝申し上げます。

第１章　研究の概要

研究主題　新しい時代で学び続ける児童生徒を育てる

～学びの積み重ねの実践とゆるやかなネットワークの構築～

研究の概要

１　研究主題設定の理由

（１）過年度の研究成果

①「私の応援計画」（個別の教育支援計画）の活用

本校では，平成 29 年度から２か年「児童生徒主体の個別の教育支援計画『私の応援計画』を活用した教育課程の編成」を主題とした研究を行った。それまでの教育支援計画は，作成はするものの十分に活用されていないということから本人・保護者が主体となる教育支援計画の作成・活用を目指して研究を実践し，児童生徒主体の教育課程のプロセスを構築した。本人・保護者が主体という意味を込め，「私の応援計画」という名称にも変更した。また，本人と教師との対話を通して，夢や思いを描き，実現に向けて目標を可視化する取組を通し，児童生徒が学びの主体であることを自覚し，将来の夢や今何を学びたいかを語れるようになってきたことは，生涯にわたり成長し続けるための力を育む素地となると考える。

②「生涯学習力」を高める教育課程の編成

平成 31 年度から２か年「児童生徒の『生涯学習力』を高める教育課程の編成」を主題とした研究を行った。研究組織は，学部の垣根を超えたワーキンググループ（以下，ＷＧ）を作り研究を実践した。１年次は，基礎研究と位置付け，卒業生の学びの状況を調査する「リサーチ」，学校と結び付きのある教育資源を整理する「資源活用」，学び方の特性を意識した授業づくりをするマルチ知能とも呼ばれる「ＭＩ」のＷＧにおいて実践した。２年次は，教育課程の編成に向けて「私の応援計画」でも用いている「働く」「暮らす」「楽しむ」の三つのＷＧにおいて進めた。２か年の研究において，生涯学習を進める上で大切な要素や「生涯学習力」の定義付け，「生涯学習力」を高めるための教育課程の編成を行った。教育課程の編成においては，生涯学習の観点から「学びを積み重ねていくこと」や「地域と持続可能なネットワークを築いていくこと」，「児童生徒が継続的に将来の夢や学びたいことを表出していくこと」の大切さを確認した。

（２）社会の要請

平成 31 年「障害者の生涯学習の推進方策について」では，学校教育における学びと学校卒業後の学びを接続させ，生涯にわたって学び続けられるようにすることが重要と述べられた。また，Society5.0，人生 100 年時代と表されるように変化の激しい時代に突入していると言われており，学習指導要領においても，この時代において生涯にわたって能動的に学び続けることや，そのために教育において ICT を有効に活用していくことが求められている。

（３）本校の実態等

本校は，県の中心部に位置しており，多種多様な学びの場が学校の周辺に多くある恵まれた立地にある。学校としては，学部を超えた学習や実践が可能な規模である。また，大学の附属校として『生きる力　学びのその先』を見据えた研究を行っていこうとしている。

以上のことから，これまでの研究成果を基に，児童生徒がこれからの変化の激しい時代の中でも生涯にわたって学び続けるための力を身に付けてほしいと願い，本研究主題を設定した。

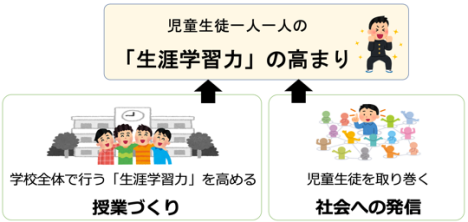
「生涯学習力」の定義

平成 31 年度からの研究において，本校として「生涯学習力」は，<u>主体的にヒト・モノ・コトに関わり生涯にわたって学びに向かい成長しようとする力</u>と定義付けた。

2　研究の目的と方法

本研究は２か年計画の研究である。研究目的は，児童生徒一人一人の「生涯学習力」を高めていくことである。

研究方法は，①学校として学びを積み重ねていくことを意識した「生涯学習力」を高める授業づくり，②研究の取組や授業での関わりを通して，児童生徒を取り巻く社会への生涯学習の価値の発信である。



3　研究の内容

過年度の研究を通して得られた生涯にわたり学び続けていくための重要な要素としては，「生活の中で，出会いや関わりがあること」，「ロールモデルの存在や夢・希望を描き，思いを表出する機会があること」，「自分の周りの人や物事に興味や関心や広げたり，物事や生活をよりよくしようとする気持ちをもったりすること」「自分の身近に学ぶ場があると知っていることや学びの情報とつながれること」，「地域社会が生涯学習の価値を理解していること」などが挙げられる（図１）。これらの要素を意識し，次の内容で研究を進めた。

図１　生涯にわたり学び続けていくための要素

（１）ワーキンググループによる研究

全校体制で「生涯学習力」を高めるために学びを積み重ねるための授業づくりや，ゆるやかなネットワークを構築するための基盤となる一年と位置付け，学部の枠を超えた授業づくりワーキンググループ」，「オリジナルマップ活用推進ワーキンググループ」，「地域とつながるワーキンググループ」を組織し，研究を進めた。また，授業づくりから情報を集めたり，ワーキンググループでの検討結果を授業づくりに生かしたりと往還的な関係をもたせた（図２）。

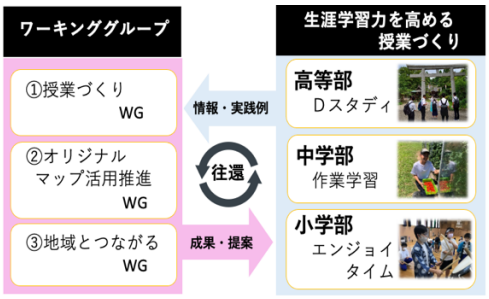


図２　研究組織

（２）各学部の授業づくり

対象の学習を選定し授業づくりを実践した。小学部は，昨年度の研究成果からスタートした児童の興味・関心を広げたり，好きなことを深めたりすることをねらいとした「エンジョイタイム」，中学部は，仲間との協働を通して得意な作業を見付けたり，作業能力を身に付けたり，責任をもって取り組んだりすることをねらった「作業学習」，高等部は，問題発見や問題解決の力や方法を身に付け，様々な場面で行動する力をねらった「Dスタディ」で実践した。

（３）「生涯学習力」を高めるための研修

児童生徒一人一人の「生涯学習力」を高めることを目指して，全校で講演を拝聴する機会を設定した。設定した講演と演題については，次のとおりである。

研修の機会	演題	講演者
夏のセミナー	「生涯学習力」を高めるために学校で積み重ねる学びについて	東京学芸大学 名誉教授　菅野　敦　様
公開研究協議会	生涯にわたって学び続ける子どもを育てる授業づくり	都留文科大学 准教授　堤　英俊　様

（４）研究成果等の発信

研究の内容や成果について，本校の夏のセミナー，公開研究協議会，ホームページ，研究紀要，キャリア発達支援研究会第９回年次大会（広島大会），『季刊「特別支援教育」第 84 号』，「共に学び，生きる共生社会コンファレンス関東甲信越ブロック」等で発信した。

第２章

ワーキンググループによる研究

授業づくりワーキンググループ

１　研究の目的

平成３１年度の研究で定義した「生涯学習力」を各学部で具体化し，授業づくりに生かす。

２　研究の内容

（１）　生涯学習力の具体化と検証

①生涯学習力の具体化

平成３１年度の研究で「生涯学習力」は，「主体的にヒト・モノ・コトに関わり，生涯にわたって学びに向かい成長しようとする姿」と定義されている。「生涯学習力」を高める授業づくりをするために，まずは「生涯学習力」を改めて共通理解する必要があった。そこで，小学部は「エンジョイタイム」，中学部は「作業学習」，高等部は「Ｄスタディ」の授業を取り上げ，それらの授業で「児童生徒に育みたい力」や「生涯学習力が高まった姿」について検討を行い，「生涯学習力」を具体化してキーワードにした（図１）。

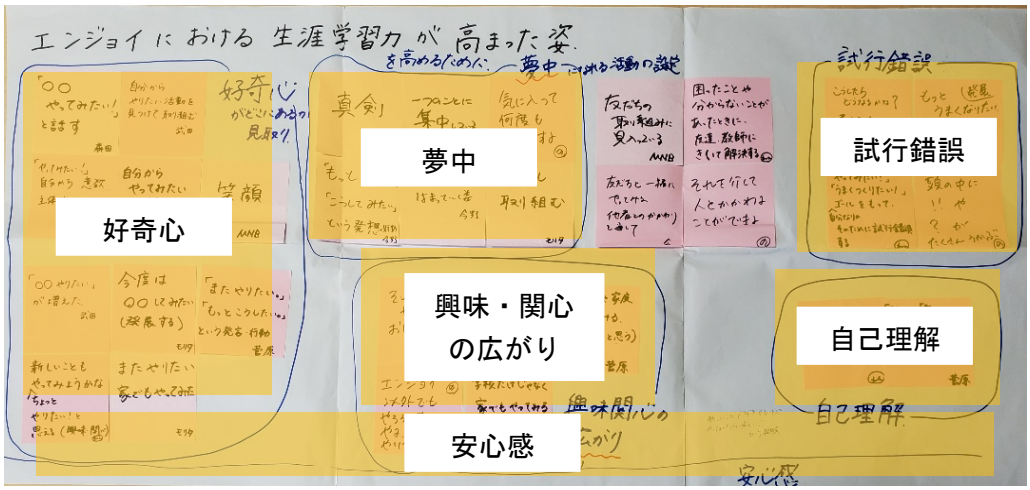
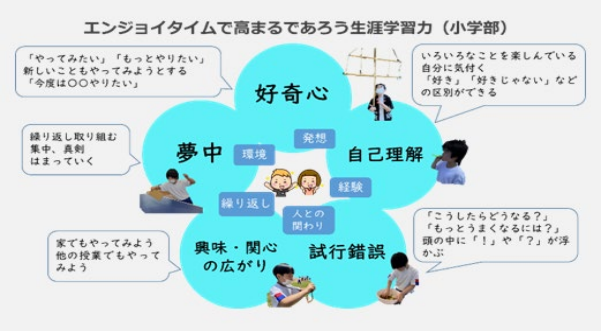
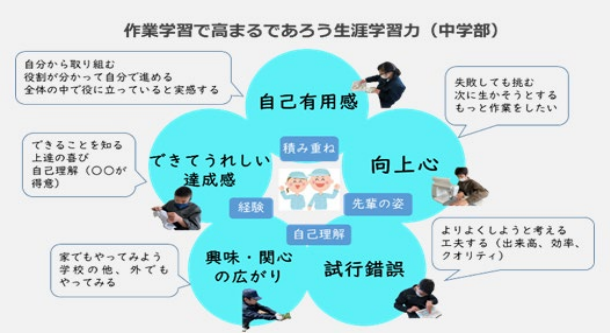


図１　生涯学習力の具体化





「生涯学習力」を具体化したこれらのキーワード（図２）が，児童生徒の実態や児童生徒の教育的ニーズと比較して適切かどうかを，学部ごとの授業研究会やエピソード記録を活用した学部カンファレンスで検証した。

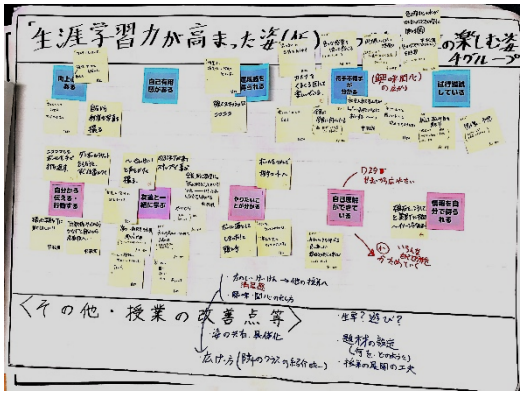
図２　「生涯学習力」を具体化したキーワード

②具体化したキーワードの検証

ア検証その１　授業研究会

「生涯学習力を具体化したキーワード」を基に，各学部で授業を行い，授業の中で児童生徒の学習に取り組む姿から，「生涯学習力」を具体化したキーワードがふさわしいものなのか，キーワードに当てはまるか，また，新たな視点はないかなどの意見を出し合った。

小学部の授業研究会では，エンジョイタイムを通して育んでいる力が生涯学習力の素地となっているかを確認するために，児童が楽しんでいる姿が，中学部・高等部の「生涯学習力を具体化したキーワード」とどのようにつながっているのか意見を出し合った。例えば，カメラで自分から何度も写真を撮る姿は「向上心」につながっている，教師に「磁石をこうしてください」と伝える姿は「情報を自分で得ること・伝えること」につながっているなど，どのグループでも，児童の楽しむ姿を，中学部・高等部が考える「生涯学習力」に分類できており，つながっていると確認できた。



中学部の授業研究会では，作業学習で身に付いた力や生徒の取り組む姿が，「生涯学習力を具体化したキーワード」（図３）に当てはまるのかを協議し，キーワードの見直しを図った。例えば，自分のやることが分かって活動している姿は，「生涯学習力」を具体化したキーワードの「自己有用感」，丁寧に作ろうとしている姿は「試行錯誤」に当てはまるという意見や，「切ってよい枝や収穫できるトマトを見極めていた」という生徒の姿から，「自己判断」という視点もあるのではないかという意見が挙げられた。

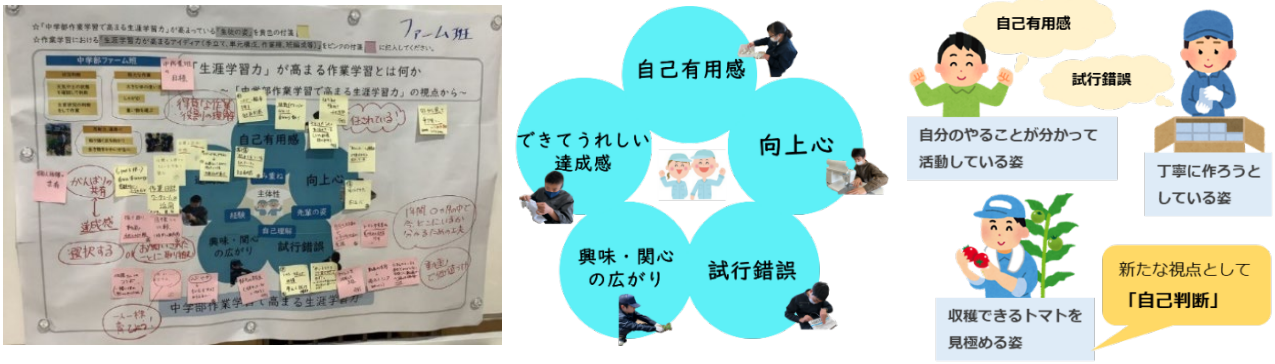


図３「生涯学習力を具体化したキーワード」

高等部の授業研究会では，本学准教授，谷村佳則先生をお招きし，次の助言をいただいた。

- 動画編集における自分の強みや得意なことを生かしながら友達や教師，地域の方など，様々な人（他者）の気持ちを受け入れて動画を改善するということは，自分の考えや気持ちを調整する「自己調整」する力が求められていた。
- 様々な人（他者）とのやり取りの中で，自分の強みや得意なことを相手や状況に合わせてどのように使うかを考える，自己理解を深めるきっかけになっていた。
- 学びの成果を「般化」し，他の学習やふだんの生活の中で生かすことが大切である。学びの成果の積み重ねが問題解決に向けて進んでいく生徒の原動力となる。

STEP 3　授業研究会から

▶他者の気持ちを受け入れ、自分の気持ちや考えを「自己調整」する力

▶他者との関係の中で「自己理解」を深めるきっかけになっていた

▶学びの成果を「般化」し、他の学習や生活の中で生かすことが大切

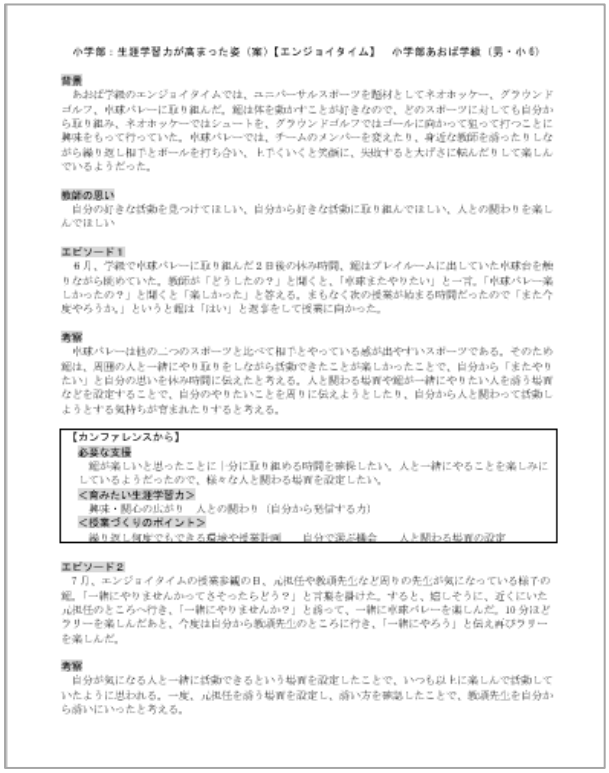
イ検証その２　エピソード記録を活用した学部カンファレンス

検証の２つ目として，各学部の抽出児童生徒のエピソード記録を基に，学部カンファレンスを行った（図４）。

初めに，抽出児童生徒の行動の背景，教師の思い，授業場面における抽出児童生徒の象徴的な出来事をエピドード１として記録した。

それを基に「育みたい生涯学習力」「必要な支援」「授業づくりのポイント」の視点で学部カンファレンスを行い，改善授業をして，その後のエピソードや考察をまとめた。

このエピソード記録を活用した学部カンファレンスを通して，児童生徒の変容を見取り，高まった「生涯学習力」について意見を出し合い，キーワードの見直しを図った（図５）。



小学部：生涯学習力が高まった姿（策）【エンジョイタイム】　小学部あおば学級（男・小６）

背景

あおば学級のエンジョイタイムでは，ユニバーサルスポーツを題材としてネオホッケー，グラウンドゴルフ，卓球バレーに取り組んだ。姫は体を動かすことが好きなので，どのスポーツに対しても自分から取り組み，ネオホッケーではシュートを，グラウンドゴルフではゴールに向かって狙って打つことに興味をもって行っていた。卓球バレーでは，チームのメンバーを変えたり，身近な教師を誘ったりしながら繰り返し相手とボールを打ち合い，上手くいくと笑顔に，失敗すると大げさに転んだりして楽しんでいるようだった。

教師の思い

自分の好きな活動を見つけてほしい，自分から好きな活動に取り組んでほしい，人との関わりを楽しんでほしい

エピソード１

６月，学級で卓球バレーに取り組んだ２日後の休み時間，姫はプレイルームに出していた卓球台を触りながら眺めていた。教師が「どうしたのヤ」と聞くと，「卓球またやりたい」と一言。「卓球バレー楽しかったのヤ」と聞くと「楽しかった」と答える。まもなく次の授業が始まる時間だったので「また今度やろうね」というと姫は「はい」と返事をして授業に向かった。

考察

卓球バレーは他の二つのスポーツと比べて相手とやっている感が出やすいスポーツである。そのため姫は，周囲の人と一緒にやり取りをしながら活動できたことが楽しかったことで，自分から「またやりたい」と自分の思いを休み時間に伝えたと考える。人と関わる場面や姫が一緒にやりたい人を誘う場面などを設定することで，自分のやりたいことを周りに伝えようとしたり，自分から人と関わって活動しようとする気持ちが育まれたりすると考える。

【カンファレンスから】

必要な支援

姫が楽しいと思ったことに十分に取り組める時間を確保したい。人と一緒にやることを楽しみにしているようだったので，様々な人と関わる場面を設定したい。

＜育みたい生涯学習力＞

興味・関心の広がり　人との関わり（自分から発信する力）

＜授業づくりのポイント＞

繰り返し何度でもできる環境や授業計画　自分で選ぶ機会　人と関わる場面の設定

エピソード２

７月，エンジョイタイムの授業参観の日，ルー担任や教頭先生など周りの先生が気になっている様子の姫。「一緒にやりませんかってさそったらどうヤ」と言葉を掛けた。すると，照しそうに，近くにいたルー担任のところへ行き，「一緒にやりませんかヤ」と誘って，一緒に卓球バレーを楽しんだ。10 分ほどラリーを楽しんだあと，今度は自分から教頭先生のところに行き，「一緒にやろう」と伝え再びラリーを楽しんだ。

考察

自分が気になる人と一緒に活動できるという場面を設定したことで，いつも以上に楽しんで活動していたように思われる。一度，ルー担任を誘う場面を設定し，誘い方を練習したことで，教頭先生を自分から誘いにいったと考える。

図４　エピソード記録

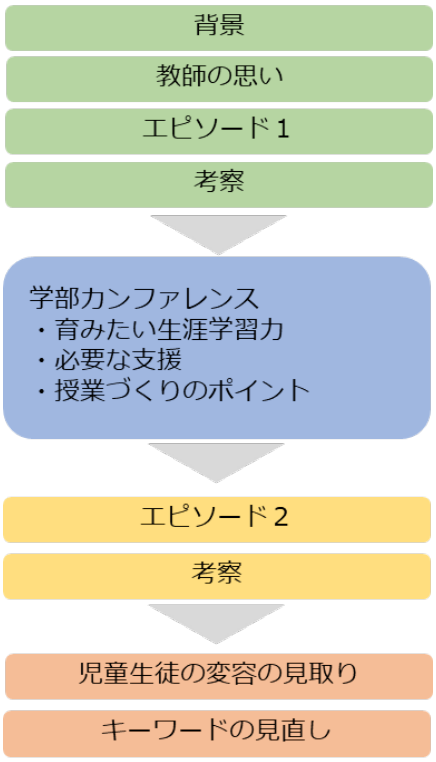


図５　キーワード見直しの流れ

授業研究会や学部カンファレンスを通して検証していく中で，「生涯学習力」を具体化したキーワードは，「生涯学習力」を高めるための授業づくりをする上で，教師が大切にしている要素でもあるという意見が多く出た。

これらの検証結果から，「生涯学習力を具体化したキーワード」としていたものを，「生涯学習力につながる，授業づくりで大切にしていること」として，次のようにまとめた。

③「生涯学習力」につながる，各学部の授業で大切にしていること

ア小学部の「エンジョイタイム」で大切にしていること（図６）

小学部では，興味・関心を広げたり，様々な経験を積み重ねたりすることが，「生涯学習力」の素地になると考えている。

この素地を育むために「エンジョイタイム」で大切にしていることは，「おもしろそう！やってみたい！」「今度はこんなことをしたい」という「好奇心」。繰り返し取り組んだり，集中して活動に向かったりする「夢中」。「もっとうまくなるにはどうしたらいいかな」などと考えながら取り組もうとする「試行錯誤」。友達が楽しんでいるのを見たり，他者からの関わりを受け入れたりしながらやってみようとする「人との関わり」。「ぼくはこれが好きだ！」「これは少し苦手」などと自分を知る「自己理解」の５つであるとまとめられた。

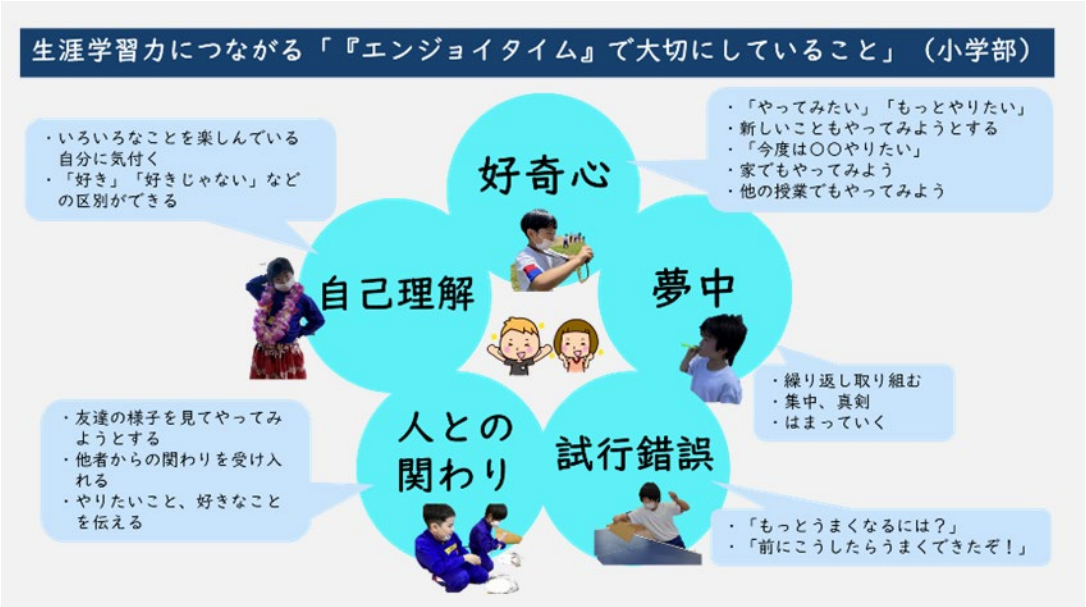


図６　小学部の「エンジョイタイム」で大切にしていること

イ中学部の「作業学習」で大切にしていること（図７）

本校中学部には３つの作業班があり，様々な作業を経験して興味・関心の幅を広げることが「生涯学習力」につながると考え，「興味・関心の広がり」を要素の一つとして挙げている。また，「自己選択・自己決定」は，自分の考えをもち，〇〇の作業をしよう，〇〇がやりたいなど自分で判断して作業する姿，「試行錯誤」は，製品をよりよくしようと考えたり，工夫したりすることを通して，効率や製品のクオリティ，出来高などを考えて作業すること，「自己理解」は，自分の得意な作業，苦手な作業や集団の中での自分の役割が分かること，「やり遂げる力」は，作業で失敗をしたり，うまくいかないことがあっても次に挑戦したり，生かしていこうとする姿として，５つの要素を挙げた。

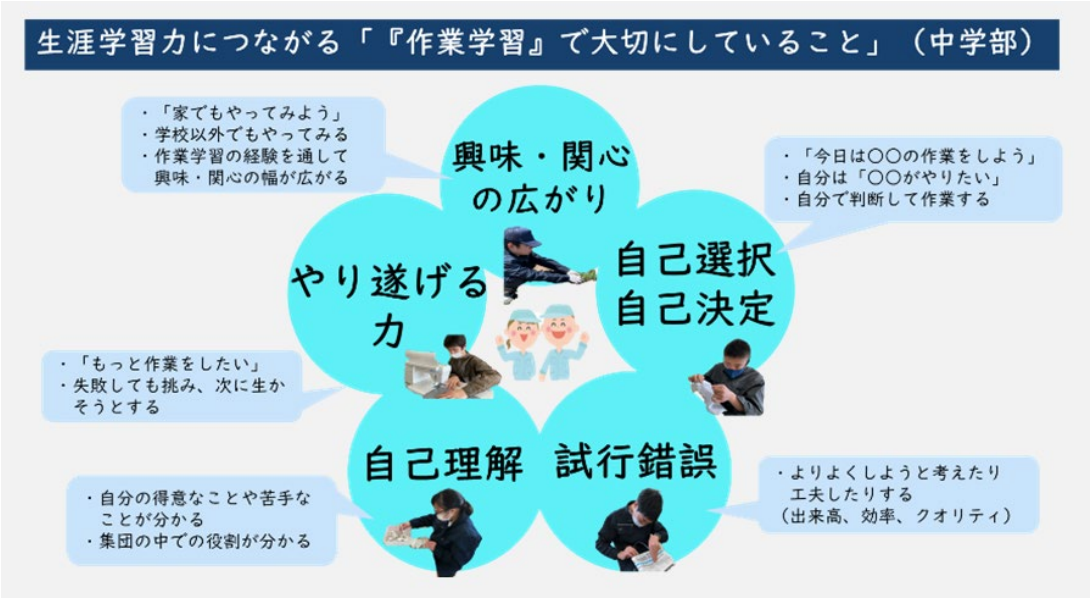


図７　中学部の「作業学習」で大切にしていること

ウ高等部の「Ｄスタディ」で大切にしていること（図８）

高等部では，自分の強みや得意なこと，得意な学び方を知る「自己理解」。様々なこと・場所で，自分から「やってみよう！」とする気持ちを高める「実行力」。自分で考え，選んだり，決めたりして行動する「自己選択・自己決定」。情報の収集，分析，整理，活用ができることや，相手に伝わるように伝えることができる「情報活用力」。そして，友達や様々な人との関わりや余暇の広がりにつながる経験の「社会性」と設定した。

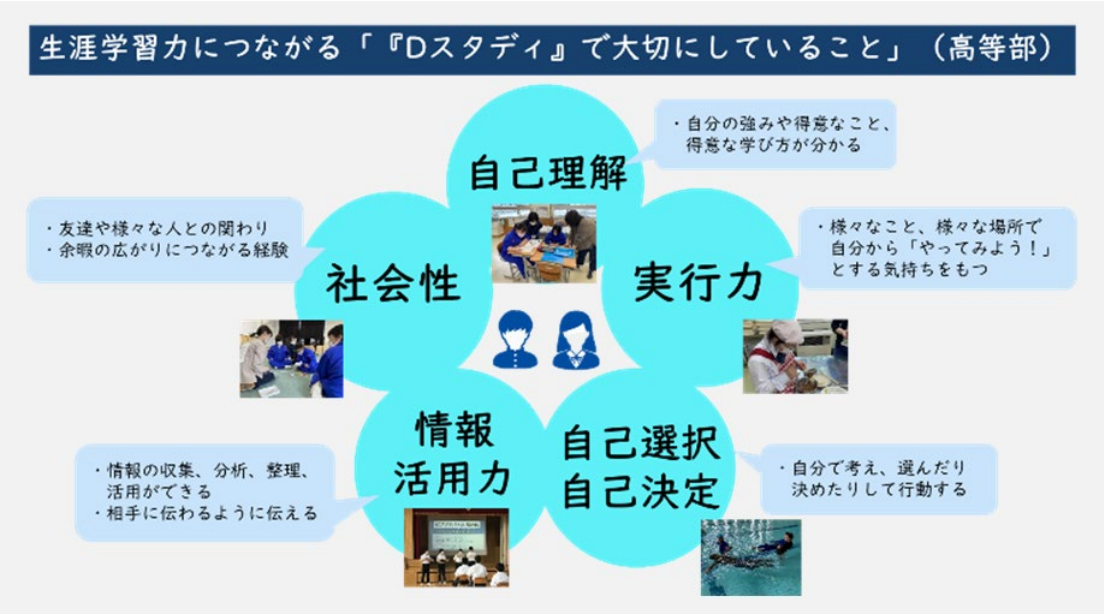


図８　高等部の「Ｄスタディ」で大切にしていること

（２）学部間のつながりの検証

学部ごとにまとめた，それぞれの授業で「大切にしていること」を照らし合わせると，「自己理解」がどの学部にも共通して見られた（図９）。

具体的な姿に着目すると，小学部では「自分」，中学部では「集団の中での自分」，高等部では「自分を客観的に捉え，自分の力を社会の中で発揮する」というように，「自己理解」というキーワードでも言葉の捉えが発達の段階によって異なることが分かった（図 10）。

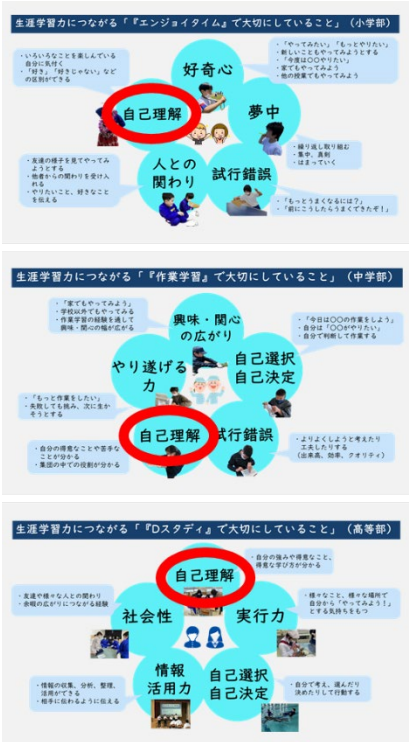


図９　各学部の「自己理解」

「自己理解」

高等部	• 自分の強みや得意なこと、得意な学び方を知る • 自分の力を社会の中で発揮する
中学部	• 自分の得意なことや苦手なことが分かる • 集団の中での役割が分かる
小学部	• いろんなことを楽しんでいる自分に気付く • 「好き」「好きじゃない」などの区別ができる

図 10　各学部の「自己理解」の捉え

また，小学部の「真剣に集中して取り組む姿」の「夢中」が，中学部の「失敗しても最後まで取り組もうとする姿」の「やり遂げる力」につながっていたり，小学部の「他者からの関わりを受け入れる姿」の「人との関わり」が，高等部の「友達や様々な人と関わる姿」の「社会性」につながっていたりと，同じような要素を大切にしていることが分かり，学部が違っても「生涯学習力」の具体的な姿を同じように捉えられていると確認できた（図 11）。

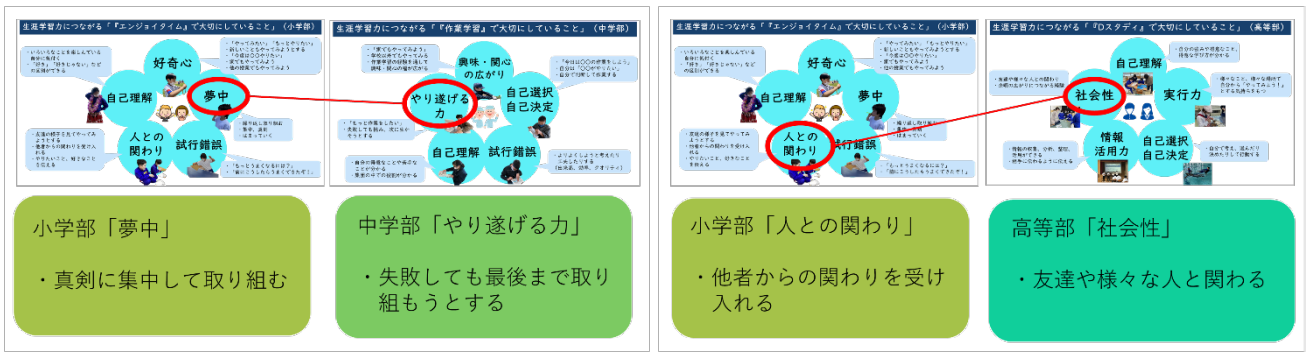


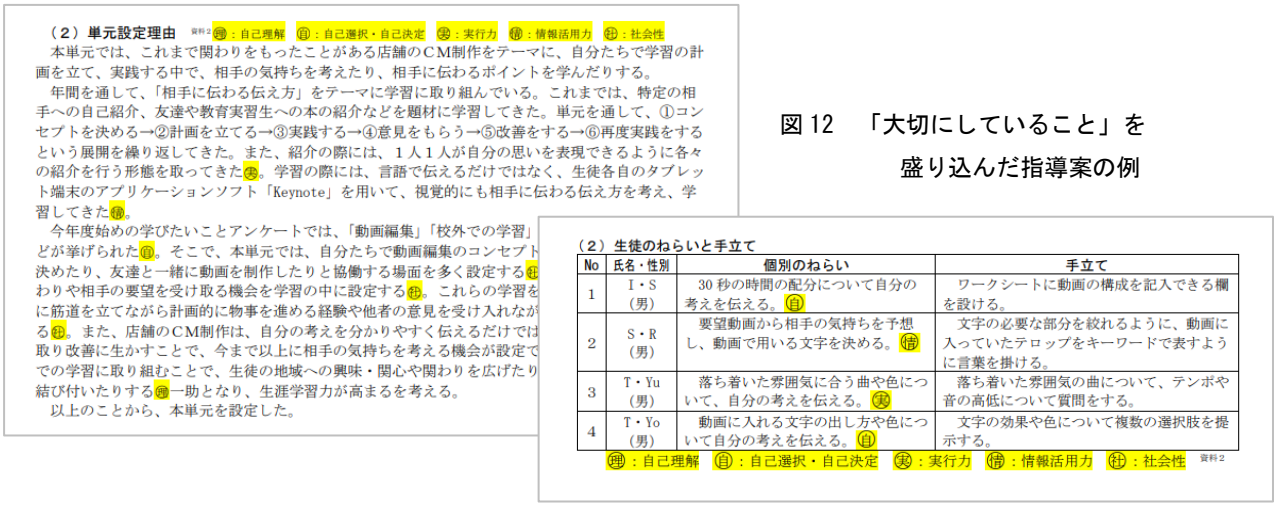
図 11 学部の「大切にしていること」のつながり

3　今後に向けて

今後の展望としては，今年度各学部で作成した，「生涯学習力につながる，大切にしていること」を活用した授業づくりを考えている。

各学部で大切にしている５つの要素を指導案に盛り込み，授業の評価や変容を見取る視点として活用していく（図 12）。児童の変容を見取る際には，今年度同様エピソード記録も活用していきたいと考えている。

また，今年度は各学部一つの学習場面を取り上げて「生涯学習力につながる，大切にしていること」を検証したが，他の学習場面でも活用し，汎用していきたいと考えている（図 13）。



（２）単元設定理由　資料２ 理：自己理解　自：自己選択・自己決定　実：実行力　情：情報活用力　社：社会性

本単元では、これまで関わりをもったことがある店舗のＣＭ制作をテーマに、自分たちで学習の計画を立て、実践する中で、相手の気持ちを考えたり、相手に伝わるポイントを学んだりする。

年間を通して、「相手に伝わる伝え方」をテーマに学習に取り組んでいる。これまでは、特定の相手への自己紹介、友達や教育実習生への本の紹介などを題材に学習してきた。単元を通して、①コンセプトを決める→②計画を立てる→③実践する→④意見をもらう→⑤改善をする→⑥再度実践をするという展開を繰り返してきた。また、紹介の際には、１人１人が自分の思いを表現できるように各々の紹介を行う形態を取ってきた実。学習の際には、言語で伝えるだけではなく、生徒各自のタブレット端末のアプリケーションソフト「Keynote」を用いて、視覚的にも相手に伝わる伝え方を考え、学習してきた情。

今年度始めの学びたいことアンケートでは、「動画編集」「校外での学習」どが挙げられた自。そこで、本単元では、自分たちで動画編集のコンセプト決めたり、友達と一緒に動画を制作したりと協働する場面を多く設定する社わりや相手の要望を受け取る機会を学習の中に設定する社。これらの学習を に筋道を立てながら計画的に物事を進める経験や他者の意見を受け入れなが る社。また、店舗のＣＭ制作は、自分の考えを分かりやすく伝えるだけでは 取り改善に生かすことで、今まで以上に相手の気持ちを考える機会が設定で での学習に取り組むことで、生徒の地域への興味・関心や関わりを広げたり 結び付いたりする理一助となり、生涯学習力が高まるを考える。

以上のことから、本単元を設定した。

（２）生徒のねらいと手立て

No	氏名・性別	個別のねらい	手立て
1	I・S（男）	30 秒の時間の配分について自分の考えを伝える。自	ワークシートに動画の構成を記入できる欄を設ける。
2	S・R（男）	要望動画から相手の気持ちを予想し、動画で用いる文字を決める。情	文字の必要な部分を絞れるように、動画に入っていたテロップをキーワードで表すように言葉を掛ける。
3	T・Yu（男）	落ち着いた雰囲気に合う曲や色について、自分の考えを伝える。実	落ち着いた雰囲気の曲について、テンポや音の高低について質問をする。
4	T・Yo（男）	動画に入れる文字の出し方や色について自分の考えを伝える。自	文字の効果や色について複数の選択肢を提示する。

理：自己理解　自：自己選択・自己決定　実：実行力　情：情報活用力　社：社会性　資料２

図 12　「大切にしていること」を盛り込んだ指導案の例

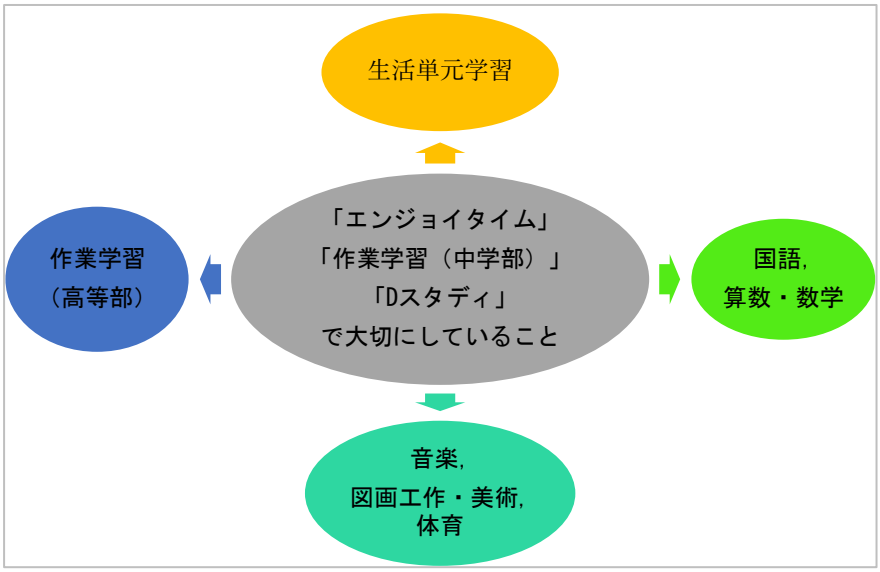


図 13　他の学習場面への汎用

オリジナルマップ活用推進ワーキンググループ

１　研究の目的

昨年度の研究において作成・活用を提案した本校のオリジナルマップの活用を切り口とし，生涯学習力を高める授業づくりを進めるために効果的なツールを作成し，活用するための仕組みをつくることを目的として研究を進めた。

２　研究の内容

（１）本校のオリジナルマップとは

本校で作成しているオリジナルマップとは，グーグルマップの「グーグルマイマップ」という機能を用いて作っているマップ（図１）で，学習で利用した施設や行ってみたい施設などをメモや写真と共に記録している（図２）。マップをツールとして活用することのメリットとしては次の点が挙げられる。

・情報が視覚的に分かりやすい。
・学校や自宅，それぞれの施設との地理的な関係が分かりやすい。
・写真，メモ，などの様々な情報を必要に応じて足すことができる。
・施設の web サイトにすぐに接続できる。

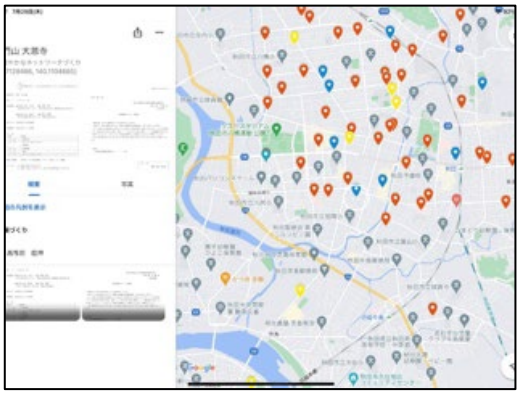


図１　オリジナルマップ

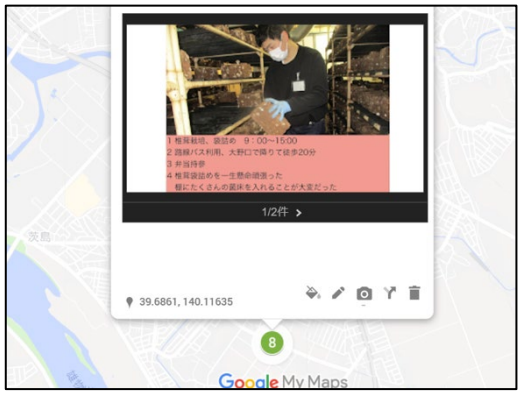


図２　学習の記録

（２）オリジナルマップ活用に向けた取り組み

オリジナルマップ活用に向けた取組として，次の３点から研究を進めた。

①オリジナルマップと教育課程との関連の整理

オリジナルマップを活用した学習は，マップそのものの完成がゴールではなく，オリジナルマップを活用した学習を通して，自分が頼るヒト・モノ・コト，自分を充実させるヒト・モノ・コトなどの，地域の活用できるヒト・モノ・コトに気付いたり，分かったりすることが大切であると考えた。

さらに，このオリジナルマップを活用した学習を推進することで，自ら学習を進めようとする意欲や，「生涯学習力」を高めようとする動機付けにつながり，教育課程全体では，マップやマップの学習で分かったヒト・モノ・コトと関わるための知識・技能の習

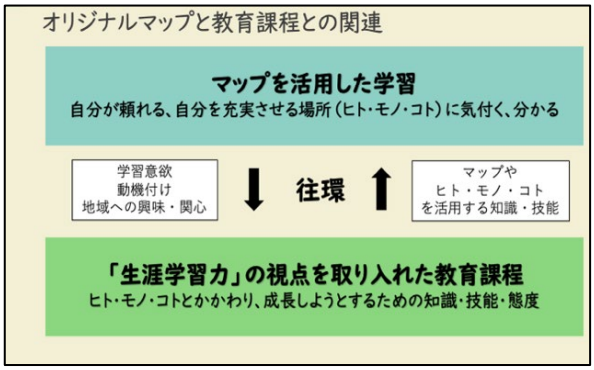


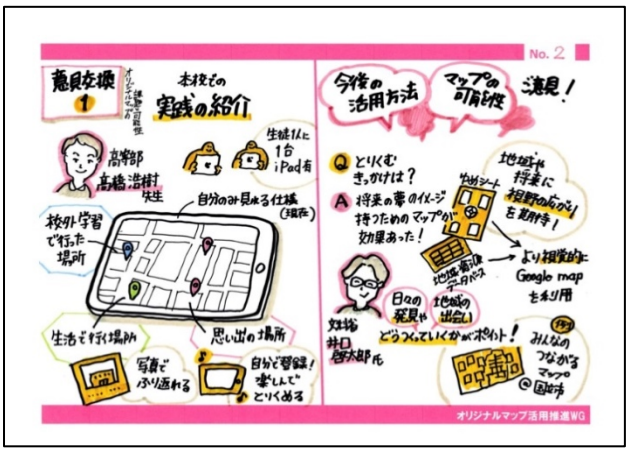
図３　オリジナルマップと教育課程との関連

得につながるという往還となると考えた。（図３）

②夏のセミナー

本校が開催した夏のセミナーでは，マップを活用した本校での実践について紹介し，次の点について示唆を得た（図４・５）。

・夢や思いの実現に向けて子どもたちの世界を広げることが大切であること。
・生徒それぞれのマップを共有することで効果が高まるのではないかということ。
・実体験と抽象概念をつなげていく上でＩＣＴ機器が効果的であること。
・卒業後も使えるツールになることが望まれること。



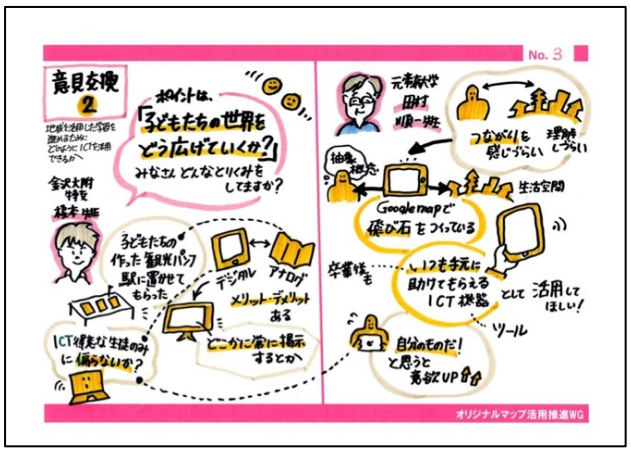


図４・５　夏のセミナー　意見交換より

③環境の整備

オリジナルマップの効果的な活用に向けて，次の環境整備を進めた。なお，環境整備に当たっては，パナソニック教育材財団の助成を受けて行った。

・共有による学びの深まりという視点から，校内に生徒それぞれのマップを共有するためにモニターを設置。
・様々な実態に対応し，写真などに直感的に情報を書き込んでマップに反映できるように，Apple Pencil を導入。
・情報機器の活用の仕方やマップを授業づくりに生かすための，職員研修の実施。

写真１　モニター活用の様子

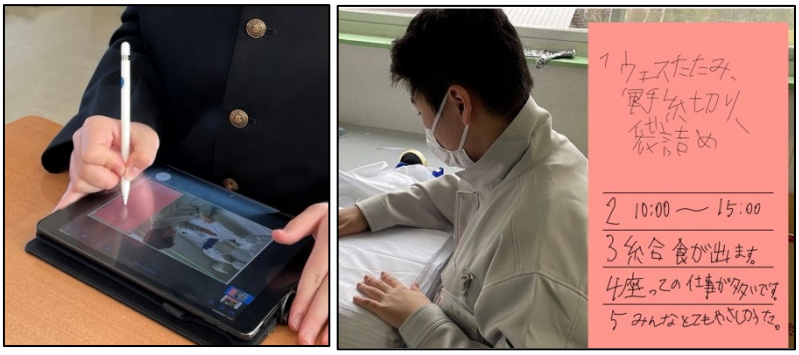


写真２　Apple Pencil 活用の様子と実際に記入したもの

（３）オリジナルマップ活用の実際

オリジナルマップを活用した実践を進めるに当たって，「生涯学習の高まり」をゴールとした小学部から高等部までの一貫した活用を目指し，段階的に活用することとした。そこでワーキンググループのメンバーで，各学部において必要とされる力や目指すところについて付箋紙を用いて整理を行

い，学部間での一貫性を図のように想定した。今年度は各学部の特定の学習集団において活用を進め，段階的なオリジナルマップの活用について検討した（図６）。

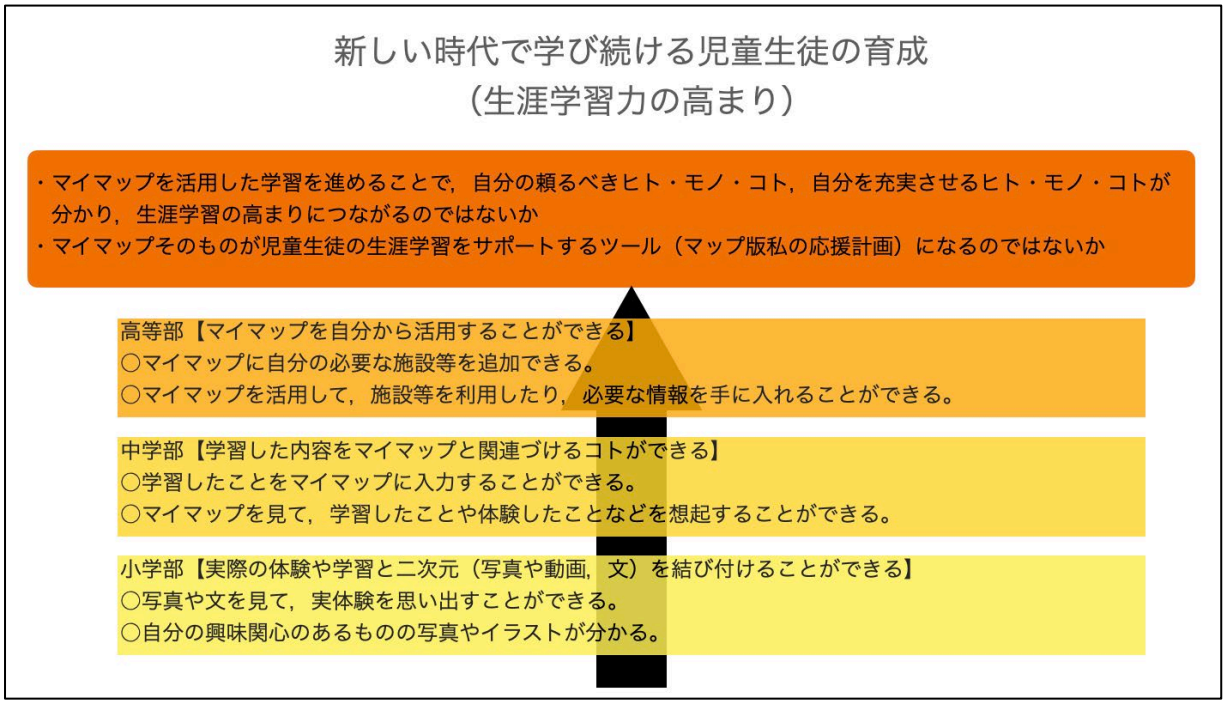


図６　オリジナルマップの段階的活用に向けて

①小学部の実践

アオリジナルマップ活用に向けての方針

小学部においては，オリジナルマップを活用することに向けて，マップを含めたＩＣＴ機器に慣れること，実体験と文字や写真といった抽象概念とを結び付ける経験が大切であると考えた。

イ具体的実践

小学部の教育活動について，ワーキンググループ内の小学部職員で次の２点を整理し，オリジナルマップ活用に向けて小学部段階で大切となることをまとめた。

・実体験と文字や写真等の概念といった抽象概念とを結び付けることにつながる教育活動
・小学部の教育活動において現在ＩＣＴ機器を活用している場面

ウオリジナルマップの活用に向けた課題

小学部の教育活動について整理したものが表１・２である。

表１　今年度の小学部における実体験と抽象概念とを結び付けることにつながる教育活動（抜粋）

単元・題材	指導の形態	学習グループ	具体的な活動内容	頻度等
おもいでをかこう	生活単元学習	あおば・わかば	写真と文字による作文指導	月２～４回程度
アルバムをつくろう	生活単元学習	わかば	写真アルバムの作成	月１回
エンジョイタイム	生活単元学習	全学級	写真とコメント記入での学習の振り返り	年３回
なかよしレクレーション	生活単元学習	全学級	写真を使った事前学習	年１回
なかよしレクレーション	生活単元学習	全学級	写真とコメント記入での学習の振り返り	年１回
わかはと祭	生活単元学習	全学級	写真や動画を使った事前・事後学習	年１回
ステップアップあおば	生活単元学習	あおば	イラストと写真を用いた好きなものシートの作成	年３回
チャレンジあおば	生活単元学習	あおば	地図アプリによる買い物の事前学習	年６回

表２　今年度の小学部におけるＩＣＴ機器を活用している場面（抜粋）

具体的な活用場面	指導の形態	主な使用者
写真や動画の提示	各教科、生活単元学習	教師
漢字・計算等の学習アプリの使用	国語、算数	児童・教師
学習の記録としての動画撮影、振り返りとしての動画の再生	各教科、生活単元学習	教師
風景や作品などの写真撮影	図工	教師・児童
授業の流れの提示や板書としての活用	音楽	教師
ダンスの仕方や体の動かし方といった手本など提示	体育	教師
YouTubeの使用	休み時間	児童
リモート授業での活用	各教科等	教師

教育活動の整理を通して，次のことが確認できた。

【実体験と抽象概念との結び付き】

・主として生活単元学習を中心に行っている。

・写真にコメントを貼るなどの具体的な活動が多い。

・年間を通じて，行事や単元の節目などに多く行っている。

【ＩＣＴを活用している場面】

・特定の学習集団や教科に限らず，全学級において様々な教科や各教科等を合わせた指導で活用されている。

・主として教師が操作して活用している場面が多い。

これらの実態から，小学部において，オリジナルマップの活用に向けて必要な取り組みは次の点であると考えた。

・実体験と抽象概念とを結び付けることにつながる教育活動の継続

・児童自身が主体となってＩＣＴ機器を操作する場面の設定

②中学部の実践

アオリジナルマップ活用に向けての方針

中学部段階では，オリジナルマップの使い方や活用の方法を体験的に理解するために，自分の興味や関心に基づいて学習の中でオリジナルマップを活用することが大切であると考えた。

イ具体的実践

・中学部３年生の生活単元学習「きらきら探検隊　修学旅行にレッツゴー」の中でオリジナルマップを活用した。この単元は，修学旅行に向けての調べ学習を中心とした単元である。修学旅行の行き先や行程について調べて，修学旅行の結団式の際にオリジナルマップで行程と活動内容について中学部１・２年生に発表をした（図７・写真３）。

・「私の応援計画」への活用として，「はたらく」「くらす」「たのしむ」の観点から，今活用している施設，将来活用したいと考えている施設を選び，「ゆめシート」に記入した。３年生が作った「ゆめシート」を中学部１・２年生にオリジナルマップで伝える機会を設定した。

図７　オリジナルマップを活用したしおり

写真３　オリジナルマップを活用した発表

ウ成果と課題

これらの実践を通して生徒に次のような姿が見られ，中学部段階において興味・関心に即してオリジナルマップを活用することが身近な地域に興味をもつことやそれらの理解を深めることなどに有効である

ことが示唆された。
・校外学習や修学旅行の事前学習で，目的地を入力することで，場所，実際の写真，ルートをイメージすることができた。
・オリジナルマップを活用した発表では，中学部１・２年生が視覚的に分かりやすく，イメージを広げることにつながった。
一方で，オリジナルマップを定期的に活用する場面がないと，生徒が自身から活用することにつながらないという課題も見られた。

③高等部の実践

アオリジナルマップ活用に向けての方針

高等部では，オリジナルマップの実際的な活用に向けて，オリジナルマップを実生活と結び付けて活用することが大切であると考えた。

イ具体的実践

高等部１年生の生活単元学習「現場実習を紹介しよう」の中でオリジナルマップを活用した。この単元では，中学部３年生に自分達の現場実習の様子を伝えることを目的として，現場実習の振り返りやその発表を行った。オリジナルマップの具体的な活用場面は次のとおりである。
・自分の現場実習の様子を写真や文字とともにオリジナルマップに記録する。
・自分の作ったオリジナルマップを使って，中学部３年生に実習の様子を発表する（写真４）。

写真４　発表の様子

ウ　成果と課題

この実践を進める中で次のような生徒の姿が見られた。
・オリジナルマップに実習先を掲載するときに，実習先の作業内容や勤務時間だけでなく，自宅からの行き方も含めた情報を記入することができた。
・実習で印象に残ったこと，行ってよかったこと，難しかったことを自分の言葉で中学部生に伝えたことで改めて自分たちの実習を振り返ることができた。
・学校でのオリジナルマップの学習を生かして，新しく通う美容室を登録，実際に利用するなど家庭生活においてオリジナルマップを活用した。
一方で，オリジナルマップを授業で意図的に活用する機会をつくっているが，生徒たちが「いつ」「どのように」追加していくかを検討し，持続可能な活用ができるシステムを構築することが課題として挙げられた。

３　今後に向けて

今年度の研究から，オリジナルマップを活用した学習を進めることで，身近な地域資源についての興味・関心が高まること，地域資源についての理解を深める上でオリジナルマップを活用した学習が有効であることが示唆された。このことから，生涯学習力を高めていく上でオリジナルマップが有効なツールとなると考える。また，オリジナルマップを活用した学習を進めていくことで次の３点についての効果が期待される。

（１）ＩＣＴ活用能力の向上

これからの変化の激しい時代において自分から学び続けるためには，ＩＣＴ活用能力は必要不可欠な力である。オリジナルマップを活用した学習では，オリジナルマップを作成，利用する過程で，機

器を操作する力や必要な情報を取捨選択する力といったＩＣＴ活用能力が体験的に育まれていくと考えられる。

（２）学習の履歴を積み重ねていくポートフォリオ

学習の記録や活動の写真をオリジナルマップ上に蓄積していくことで，個人の学びの深まりや広がりが視覚的に分かるポートフォリオとなることが期待される。オリジナルマップは個人のマップであるため，学部に関係なく一つのマップにこれまでの学習の履歴が蓄積されていく。そのため，児童生徒自身だけではなく，教師間で活用することで，これまでの学習の履歴を共有する引き継ぎ資料としても活用することが可能となる。

（３）卒業後も自分で使えるツール

本校では，本人が主体となって作成する個別の教育支援計画「私の応援計画」を作成している。この「私の応援計画」の内容とオリジナルマップとを関連させることで，卒業後に自分が頼る場所などを利用する助けとなり，本校卒業後の生涯学習を支えるツール「私の応援マップ」になると考える。

今年度は，特定の学習集団においてオリジナルマップの活用を進めたため，長期を見越した計画的な活用や各学部間のつながりといった課題が見えてきた。より効果的にオリジナルマップを運用をしていくためにはオリジナルマップを活用した実践を積み重ねていく必要がある。そこで中学部で作成した「中学部オリジナルマップマニュアル（試案）」（図８～10）を今後のオリジナルマップ活用の基礎とし生涯学習の高まりに向けた実践を全校体制で進めていきたい。

図８　マニュアル表紙

図９　オリジナルマップの作り方

図 10　中学部の実践

地域とつながるワーキンググループ

1　研究の目的

「生涯学習力」を高めるため，学校と地域との間で「ゆるやかなネットワーク」を構築し，どのように地域に働き掛けていけばよいかを提案する。

※「ゆるやかなネットワーク」とは･･･持続可能な地域と共に学ぶ体制。学校として，「担当が変わってもつながることができる」「時間をおいてもつながることができる」「学校を温かく見守ってくれる存在がいる」状態。

2　研究の内容

地域とつながるワーキンググループ（以下：地域とつながるWG）では，昨年度までの研究で提案された内容を踏まえ「生涯学習力」を高めるための要素として地域と共に学ぶ体制づくりが必要であると考え，今年度の研究を進めてきた（図１）。継続してよりよく関わり続けていくにはどうしたらよいかを探るため，現在学校と関わりをもっている人，団体を対象に，意識調査と意見交換会を行った。

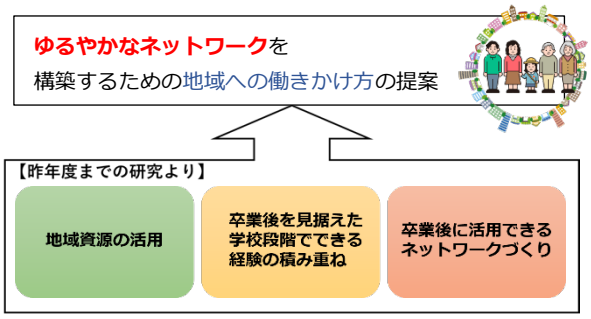


図１　昨年度の研究から

（１）意識調査「地域との関わりについてのアンケート」（１２か所）

現在，授業で関わっている 12 か所の団体や個人の方を対象にアンケートを実施し，本校と関わりを継続できている背景や要因を探った（図２，３）。（2021 年７月実施）対象の方々は１、２年関わっている方々が約半数と多いが，中には７，８年関わっているところもあり，大学竿燈会については３５年と長い関わりがある。アンケートの結果から，本校と継続して関わっている理由として，「協力可能な内容だった」「本校から依頼があった」「継続可能な回数，日程だった」「本校の児童生徒，職員の印象がよかった」といった結果が得られた。また，問７「関わる前と後で本校の印象に変化はありましたか」の回答からは，関わる前後で本校の印象に変化があったという回答が多く得られた。特に「児童生徒，職員に対する印象」「障害のある児童生徒との接し方」「『附属』という学校に対する印象」という３点について，多くの回答が得られた（図４）。

小学部	中学部
○生涯学習奨励員協議会 （絵本の読み聞かせ、紙芝居など） ○M's スポーツクラブ（体操教室） ○ペガーボール推進員（ペガーボール） ○生け花サークル（生け花教室）	○ウェルビューいずみこども園 （園児との交流） ○踊りの教室「洋の会」 （音楽における踊りの指導）
高等部	**全　校**
○08COFFEE （作業学習の技術指導、業務の一部受託） ○不衒窯（作業学習の技術指導） ○イルスタジオ（ストリートダンス） ○通町商店街（清掃活動）	○秋田大学竿燈会 （演技・囃子指導、交流会サポート） ○秋田生鮮市場（買物、製品の展示）

図２　アンケート依頼先

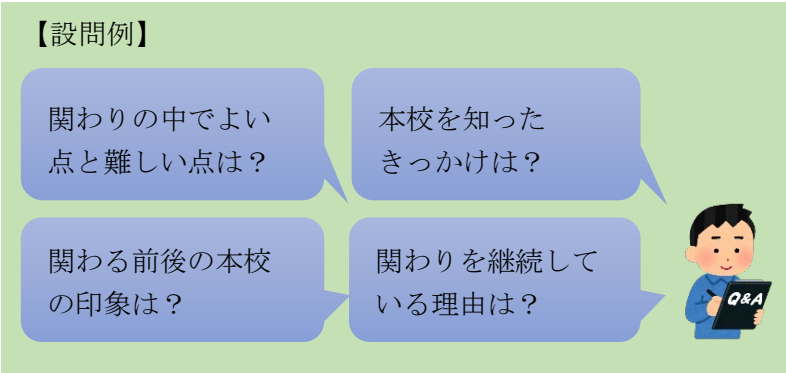
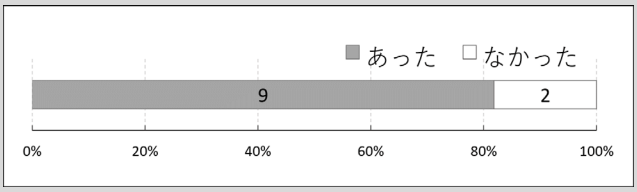


図３　アンケート設問例

【問７】
関わる前と後で，本校の印象に変化はありましたか



※無回答１

【回答例】

児童生徒，職員に対する印象	児童生徒，職員が非常に明るい雰囲気で生活をしている。児童生徒との関わり方から職員の深い愛情を感じた。
障害のある児童生徒との接し方	障害のある子どもに対しても，当たり前の接し方でよいのだと思った。
「附属」という学校に対する印象	「附属」の学校は地域と関わるイメージがなかったが，地域に貢献したい，地域との関わりを大事にしたいという気持ちが強いと感じた。

図４　関わる前後での本校の印象の変化

（２）夏のセミナーの意見交換会とＷＧでの話合いから

各分野の方々に参加いただき，地域と継続して関わっていくためのキーワードとなるものは何か，意見交換を行った。地域との連携の方法として，コミュニティスクールや地域と関わっている学習の事例について情報を共有した。地域と継続して関わるためのキーワードとして「共通の課題をもつ」「協働」といった地域との対話の重要性を共有することができた（図５）。夏のセミナー後のＷＧでの話合いで，コミュニティスクールの実践例や「共通の課題をもつ」といったキーワードから，本校でも地域の人を集めて，本校との関わりについて，情報共有や意見交換会を開催することとした。

図５　夏のセミナーから

（３）学校と地域の関わりについての意見交換会

アンケートに協力いただいた方々を対象に，「学校と地域の関わりについての意見交換会」を実施した（2021 年 12 月実施）。授業への協力以外で地域の方をお招きし，一堂に会するのは本校として初めての試みであった。当日は９名の方に参加いただいた。内容はとしては，校内の授業の様子を参観していただくことと，参加者との意見交換会の２本立てで行った。

①校内参観

校内参観では，地域の方々がふだん関わっている学部以外の児童生徒の授業の様子も参観していただく機会として設定した。参加した方々は学部によっての実態の違いに驚いたり，作業学習など児童生徒が集中して取り組んでいる様子に感心したりしながら参観していた（写真１）。

写真１　校内参観の様子

②学校と地域の関わりについての意見交換会

ア参加者同士の情報共有の場として

意見交換会の中では，参加した方々から，自己紹介とともに現在取り組んでいることや本校と関わっている中で感じたことを話していただき，情報共有を行った。

以下，意見交換会から抜粋（図６）

- 教職員との連携があるおかげで交流の内容がよりよくなっている。
- 児童生徒との接し方で悩むときがある。
- 交流を重ねたことで指導する側としてスキルアップした。
- 授業参観で児童生徒の新たな姿が見られた。
- お互いにとってメリットのある活動になっている。
- 地域で子どもを見守っていきたい。
- 関わりをもったことで，附属という学校への敷居が下がった。

意見交換会の様子

図６　意見交換会の様子から

イ意見交換会を経た参加者の感想

意見交換会の実施後，参加者に向けて感想アンケートを実施した。アンケートの回答から，学校側だけではなく，地域の方々も今回の会を有意義に感じてくださっていることが分かった。意見交換会の継続を望む声も多く聞かれた。

以下，意見交換会後のアンケートから抜粋（図７）

・今後はもっと生徒を巻き込んで授業をしてみようと思った。
・他業種の方の話を聞けてよかった。これからの取組に反映したい。
・地域の関係機関同士がつながる機会になった。
・他団体の子どもとの接し方等，参考になった。今後も意見交換会を継続してほしい。

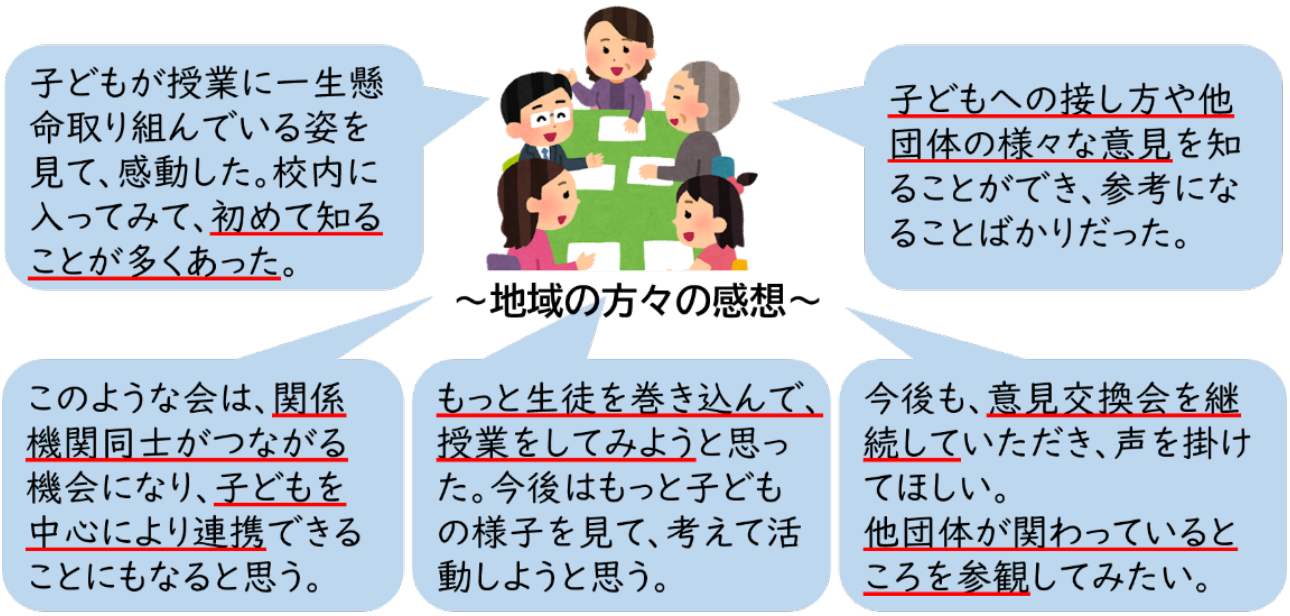


図７　意見交換会実施後のアンケートから

ウ意見交換会を経た学校職員の意見

参加した学校職員は，今回の意見交換会を経て，地域の方の声を直接聞くことができたという点や地域の方同士で情報共有をする場になった点など非常に有意義な会であり，今後も継続したいという意見でまとまっている。地域の方々に日頃から温かく見守っていただいていること，本校の児童生徒が地域の役に立っていくことなど，お互いにとってメリットのある活動を設定していくことが，関わりを継続していくために大切であると考えた（図８）。

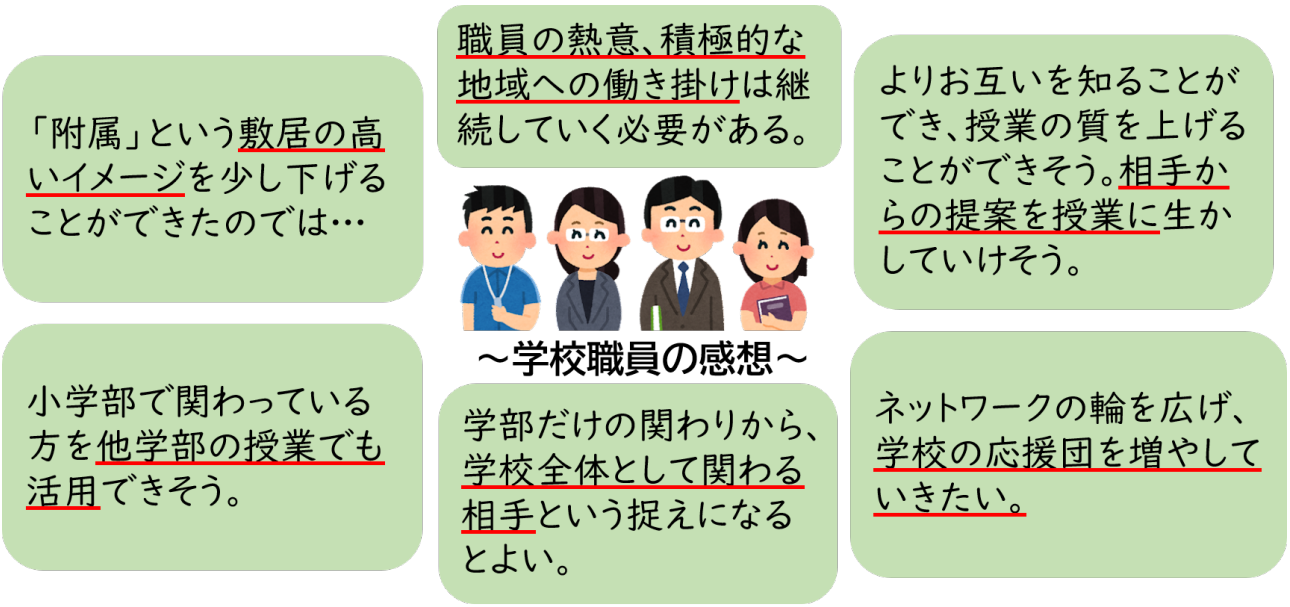


図８　本校職員の感想

エ意見交換会の成果

意見交換会を通して，小学部でお世話になっている生け花の地域の先生を高等部でも活用する機会につながった。高等部段階では，生け花の体験だけではなく理論も学んだり，地域のコミュニティセンターを利用したりするなど，より広く深く学ぶことができた。この経験を自分の居住地域でも生かせるようにつなげていきたい。高等部との関わりの後，生け花の先生にインタビューを行ったところ，「小学部と高等部では実態が違い，実態に合わせて内容や指導方法も変化させなくてはいけないため難しいと感じる」「高等部の生徒には生け花の理論も教えることができ，体験の中で理論を生かそうとしている姿も見られてうれしかった」といった話をしていただいた。また，校内参観の際に高等部陶芸班の様子を見たことから，「地域のコミュニティセンターに飾る花を，陶芸班の作った花器に飾れないか」「もっとコミュニティセンターも活用してほしい」といった提案もいただいた（図９）。生け花の活動後には，生け花の先生から紹介していただいた茶道の先生から，高等部の生徒が茶道を習うという機会もできた。一つの学部だけが関わるだけでなく複数の学部で同じ方と関わったり地域の方に複数の学部の取組を見ていただく機会を設けたりすることで，関わりに広がりや深まりが生まれたり新たな取組みにつながっていったりすることは一つの成果と言える。

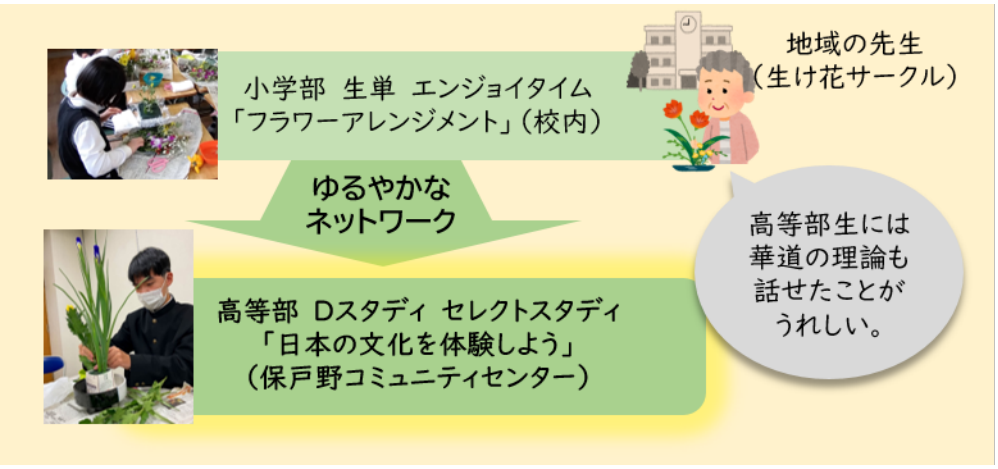


図 10　地域の先生とのつながり

３　今後に向けて

意識調査，夏のセミナー，意見交換会の実施や地域とつながるＷＧで話合いをした内容を受けて，来年度に向けて２点のことを提案したいと考える。１点目は，今回成果のあった意見交換会を今後も継続し，さらに内容を充実させていくための校内体制の整備について，２点目は来年度以降もゆるやかなネットワークを生かして生涯学習力を高めていくための授業づくりにおける工夫についてである。

（１）「学校と地域の関わりについての意見交換会」の継続と会の充実，校内体制の整備

先にも述べたとおり，学校と地域の関わりについての意見交換会に参加した地域の方々からは，「来年以降も続けてほしい」という声が多く聞かれた。そこで，地域の方により学校を知っていただけるように，会の充実も図っていきたいと考える。

①意見交換会の充実に向けて

意見交換会の充実に向けて，３点の提案を考えた（図10）。１点目は生徒の部分的な参加である。学校の紹介であったり，またはおもてなしであったりといった部分で，本校の学習で取り組んでいることを生かして生徒たちが関わることで，参加していただいた地域の方々により学校のことを知っていただくことができると考える。２点目はより幅広い立場の地域の方々に参加いただくことである。今回は，現在授業で関わっていただいている方々に限定して開催したが，今後は進路先や現場実習先

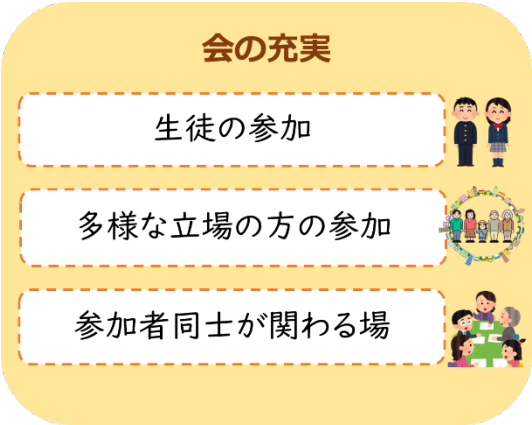


図 10　意見交換会の充実に向けて

の方々にも参加していただくことで，意見交換会での情報共有などがさらに広がりや深まりをもっていくと考える。３点目は参加者同士が関わる場を設けることである。今回，参加いただいた方々からも「他の団体の接し方が参考になった」「同じ地域の人と交流する場になってよかった」といった声が聞かれた。そういったニーズに応えることで，本校にとってだけではなく，参加していただいた方々にとっても，よりメリットのある会となり，会の継続，発展につながると考える。

②校内体制の整備について

来年度は地域とつながるWGは発展的解消となる。そのため，来年度も学校と地域の関わりについての意見交換会を行うために校内の体制を整えておくことが必要だと考える。今回，意見交換会を開催した際，意見交換会での情報がその後の授業に生きる場面があった。今後は，各学部の主事が参加し，意見交換会で得た情報を学部に持ち帰ることで授業に生かせる場面がさらに増えると考える。そのため，この意見交換会の運営を教務部の分掌業務の一つとして位置付けることを提案する（図 11）。メンバー構成については検討していく。

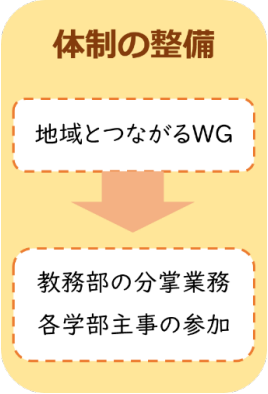


図 11　校内体制の整備

（２）ゆるやかなネットワークを生かして生涯学習力を高めるための授業づくりにおける工夫

①全校職員での情報の共有

意見交換会で得た情報は授業づくりにおいて非常に有益なものが多かった。そのため，来年度は早い段階で意見交換会を行い，その情報をすぐに全校職員に共有することで，年間指導計画を立てる際に地域の人材の活用を検討しやすくなり，より授業で生涯学習力を高めるために充実した学習ができるようになっていくと考える（図 12）。

図 12　全校への情報共有

②地域の声を聞く取組み

今回の意見交換会を通じて，地域の方の思いを直接聞くことの大切さを改めて感じた。そのため，意見交換会という学校全体の場だけではなく，一つ一つの授業でも地域の方々の生の声を聞きながら関わっていくことで，さらにゆるやかなネットワークが構築されていくと考える。具体的には授業で地域の方と関わる際，事前打合せが主となっていたが，関わっていただいた後に感想や難しかったことなどをアンケートやインタビューでお聞きする。そうすることで，より授業の目的に迫るための関わり方を検討していくことができると考える（図 13）。

図 13　地域の声を聞く工夫

（３）地域とよりよく関わるために

昨年度までの取組と今年度の取組を踏まえ，来年度以降も児童・生徒の生涯学習力を高めていくためには，地域にゆるやかなネットワークを築き，地域全体で子どもの成長を見守っていくこと，そして，その地域を生かして児童生徒が自分の居住地域でも力を発揮できるようにしていくことが大切である。そのために，より効果的な地域との関わり方を学校側，地域側の双方の視点を取り入れながら，双方にメリットのある形で探っていきたい。

第３章　授業づくりの実際

小学部の授業づくり

１　選定した学習の説明

「エンジョイタイム」は，令和２年度までの研究を受けて本年度から設定した学習である。主眼として，児童の興味・関心を広げたり，深めたりすること，児童を取り巻く地域を少しずつ広げることがある。そのために，児童一人一人が安心できる環境の下，身近な友達や教師と一緒に，様々な「ヒト・モノ・コト」との関われるような環境や題材を設定した。

本年度は，生活単元学習の中に「エンジョイタイム」の時間を週１時間設け，題材によって学級単位，学年合同で授業を行った。

本年度は，エンジョイタイムで扱う題材，単元計画及び評価の方法について検討する。エンジョイタイムと「生涯学習力」のつながりを整理し，児童の興味･関心を広げたり，高めたりするために適切な題材を選定できるようにする。また，児童一人一人の生涯学習力の高まりを評価できるように，児童の姿を見取る視点を検討することを目的とした。

２　内容

（１）生涯学習力を高めるための教育課程の編成

令和元年度までの研究において，生涯学習力を高めるためのキーワードとして，児童生徒の興味・関心を広げること，物事に没頭・熱中する経験を積み重ねること，そして，児童生徒が学校卒業後に地域で暮らしている姿のイメージを教師がもち，指導・支援を行うことが挙げられた。

令和２年度の研究では，「楽しむ」視点から，「学ぶ楽しさ」を実感すること，地域と共に子どもたちの学びを支えることが「生涯学習力」を高める教育課程の編成に必要な点であることが示唆された（図１）。特に，小学部段階では，様々なことに触れ「面白い！」と気付くなど心を動かす経験を積み重ねることで，「面白いからやってみたい」「楽しいから次はこうしてみたい」といった，学ぶ楽しさを知り，自ら学びに向かう「生涯学習力」の素地が育まれるとされている。

図１　生涯学習力を高めるために必要なこと

（２）生涯学習力と小学部の児童の実態

前年度までの研究を踏まえ，小学部の児童の実態を見ると，好きなことや興味のあることの偏りが大きいこと，同年代の小学生と比較して，様々な物事に関わる経験が少ないことが挙げられた。そこで，様々なヒト・モノ・コトに触れながら，学ぶ楽しさを実感できる場としてエンジョイタイムを設定した。

（３）「生涯学習力」につながる「エンジョイタイムで大切にしていること」の検討

①エンジョイタイムにおける「生涯学習力が高まった姿」の捉え

本校では生涯学習力を「主体的にヒト・モノ・コトに関わり，生涯にわたって学びに向かい，成長しようとする力」と定義付けている。小学部の職員全員で付箋紙によるワークショップを行い，エンジョイタイムにおける生涯学習力が高まった児童の姿について意見を出し合い整理し，５つの要素に分類した（図２）。エンジョイタイムの授業では，これらの要素に当てはまるような，児童の姿を引き出すことを共通理解した。

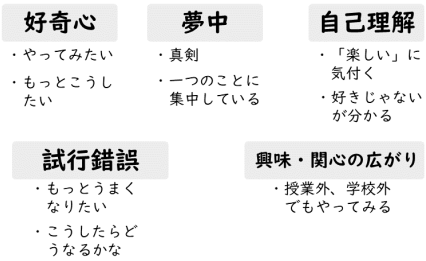


図２　エンジョイタイムにおける「生涯学習力が高まった姿」

②児童の姿から「エンジョイタイムで大切にしていること」の精選

実際に授業を行い，児童の姿を見取り，授業づくりＷＧと連携しながら，随時５つの要素の検討，修正を行った。授業づくりの指針として活用していることが分かるように，名称を「生涯学習力につながる『エンジョイタイムで大切にしていること』」へ，変更した（図３）。

図３　「生涯学習力」につながる「エンジョイタイムで大切にしていること」

（４）授業実践と「エンジョイタイムで大切にしていること」を用いた評価

学級単位で行うエンジョイタイムの題材は「児童の実態（興味・関心のある活動含む）」，「ねらい（「生涯学習力」を高める視点「かかわる・きづく・やってみる」）」，「予想される児童の楽しむ姿」の項目で検討し，設定した。毎時間の児童の様子を，エピソードとして記録した。

①授業・題材の評価

設定した題材が生涯学習力につながるものになっていたかを，児童のエピソードを用いて評価した。児童一人一人のエピソードを「大切にしていること」の５つの要素で整理し，題材ごとに多く見られた要素を抽出した。結果，題材によって多く見られた要素が異なることが分かった（表１）。

表１　「大切にしていること」の要素別　題材ごとの多く見られた児童の姿

ふたば１・２年生「カメラ」	好奇心	人との関わり	自己理解		
わかば３・４年生「そめもの」	好奇心	人との関わり			夢中
あおば５・６年生「ユニバーサルスポーツ」		人との関わり		試行錯誤	夢中
学部・中学部合同「竿燈」	好奇心	人との関わり	自己理解	試行錯誤	

②児童一人一人の変容の評価

ヒト・モノ・コトへ対する興味･関心の広がりや，何かに夢中になるといった姿は，１時間の授業の中だけでは変容を見取りにくい。そこで，エンジョイタイム実施前の年度当初の姿と，題材終了後の姿を「大切にしていること」の５つの要素で比較した。その際に，児童のヒト・モノ・コトへの関わり方を記録することで，児童が得意な関わり方が明らかになった（図４）。

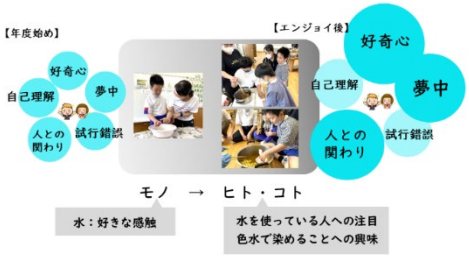


図４　児童Ａにおける５つの要素の変容

３　今後に向けて

授業の実践を通して，授業と児童の様子を評価する観点を整理することができた。次年度は「大切にしていること」の５つの要素を基に授業づくりを行い，妥当性を検証するとともに，児童一人一人の「生涯学習力」につながる要素の変容を丁寧に見取り，授業へ反映する流れを構築していく。

中学部の授業づくり

１　選定した学習の説明

本校では，中学部生徒１８名がファーム班，クラフト班，ソーイング班の三つの班に分かれて作業学習を行っている。昨年度までの研究では，「働く，暮らす，楽しむ」中の「働く」にポイントを置き，ワーキンググループで考案した，働く意欲を高めるための教育課程の編成のポイント「ストーリー（働く上での目的や楽しみを見付ける)」「気付き（自分自身を知る)」を基に，作業学習の検討をした。

これまで，手工芸や紙工，縫製など手元を見ながらじっくり集中できる作業を中心に作業班を編成していたが，多様な生徒の実態などから体を大きく使う作業種も取り入れたいと考え，今年度から農作業を中心としたファーム班を新設し，３つの班編成で作業学習を行っている。

班	作業内容	求められる力
ファーム班	トマトの栽培，花の栽培など生き物を相手にする	粗大な体の動かし方をする
クラフト班	クラフトテープでコースター作りをする	手指の巧緻性　正確に計る
ソーイング班	ミシンや染め物の布を使ってトートバックの制作をする	安全に機械操作・技術が必要

２　内容

（１）作業のねらい

中学部では，作業学習の本来のねらいである将来の職業生活や社会自立に必要な意欲，態度などを大切にして指導をしている。「生涯学習力」を高める視点で考えた場合，中学部作業学習では「働く喜びを知る」ことをねらいとすることが重要だと考えた。中学部に入学し，作業学習を経験し，働くことのやりがいを感じたり，人の役に立つ経験を積み重ねたりすることは，作業学習に取り組み始めた中学部の生徒にとって社会参加に必要な資質・能力を育むために非常に重要である。さらに，作業製品を販売する経験を積み重ねることで，お客さんに喜んでもらいたいという気持ちを育みながら，作業に向かう意欲や態度の向上につなげたい。また，作業工程や作業のきまりに沿って製品を製作したり，そのときの状況を考えながらトマトや花を育てたりする経験は，物事について深く考え，判断する力を養うと考える。

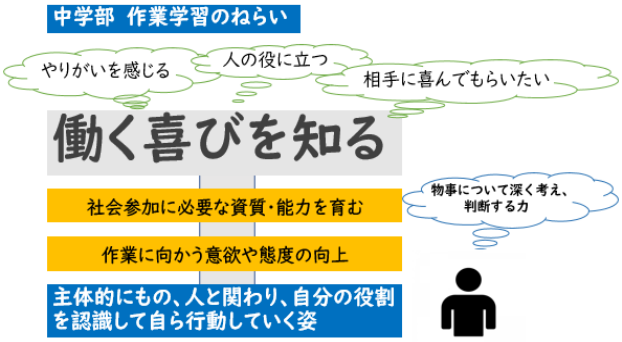


図１　中学部の作業学習のねらい

以上のことから中学部では，「働く喜びを知る」ことが主体的にもの，人と関わり，自分の役割を認識して自ら行動していく姿につながると考え，作業学習において「働く喜びを知る」ことをこれまで以上に重視し，学びに向かう態度を育んでいきたいと考えている。

（２）「生涯学習」につながる「授業づくりの要素」の検討

「生涯学習力」につながる「作業学習で大切にしていること」を学部職員で検討した。「生涯学習力」，すなわち生徒たちの将来につながるような作業学習の授業づくりを考えるに当たって，我々教師が大切にしている「授業づくりの要素」を学部で話し合い，興味・関心の広がり，自己選択自己定，

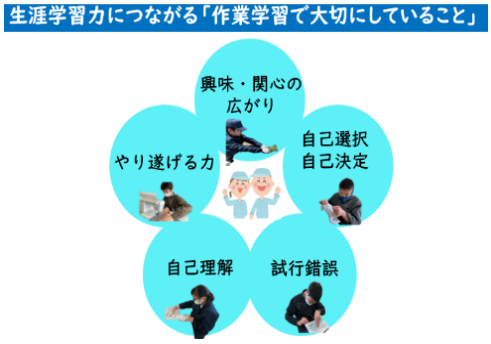


図２　「生涯学習力」につながる「生涯学習で大切にしていること」

興味・関心の広がり	作業学習の経験を通して興味・関心の幅が広がる姿。本校中学部には３つの作業班があり，様々な作業を経験し，生徒の興味・関心を広げることで，生涯学習力につながると考える。
自己選択・自己決定	自分の考えをもち，「〇〇の作業をしよう〇〇がやりたい」など自分で判断して作業する姿。自分のやりたい作業を選択して作業する班，工程が決められている班など様々であるが，自己選択・自己決定の場面を取り入れた作業学習が必要と考える。
やり遂げる力	作業で失敗をしたり，うまくいかないことがあっても次に挑戦したり，生かしていこうとする姿。失敗すること，うまくいかないことはあるが，「次はうまくやろう，何とかよくしよう」と考えることが必要であると考える。
自己理解	自分の得意な作業，苦手な作業が分かる，集団の中での自分の役割が分かることである。作業学習の授業を重ねることで，得意な作業，やりたい作業，少し苦手な作業などを少しずつ理解できるようになってくる。その上で，自分のできる作業に取り組むこと，少し苦手なことを伝えること，今は全体の中でどの辺りを作業しているのか分かって作業することなどが必要であると考える。
試行錯誤	製品をよりよくしようと考えたり，失敗を基に工夫したりすることを通して，効率や製品のクオリティ，出来高などを考えて作業することである。作業学習を始めた１年生にとっては少し難しいことではあるが，作業学習の経験を重ねてきた２，３年生はよりよい製品を作ることができるように考えたり工夫をしたりすることが求められる。そのようなことを経験することも必要であると考える。

やり遂げる力，試行錯誤，自己理解の５つを導き出した。詳細は次のとおりである。

３　今後に向けて

（１）成果

３つの作業班で「生涯学習力」につながる「作業学習で大切にしていること」を基に授業づくりをした。学部の授業研究会，授業づくりワーキンググループを通して「大切にしていること」を検討し，５つの要素を導き出し，中学部で育みたい「生涯学習力」の具体化ができたことが一番の成果である。

この５要素を授業づくりの際の教師の手立てとして生かしたり，生徒の変容を見取る際のポイントにして，エピソード記録を基にしたカンファレンスをしたりすることで学部職員が共通の視点をもちながら作業学習の授業づくりを進めることができた。

（２）今後に向けて

生徒が今後，卒業後，社会に出てよりよく生きていくためには，様々な場面で身に付けた資質・能力を発揮しながら生きていくことが重要である。そのために次年度は，今年度導き出した「大切にしていること」を教師が手立てとして授業に反映し，それらを通して，生徒が身に付けた資質・能力を作業学習以外の授業場面で生かすことができるかを検証し，実践していきたい。

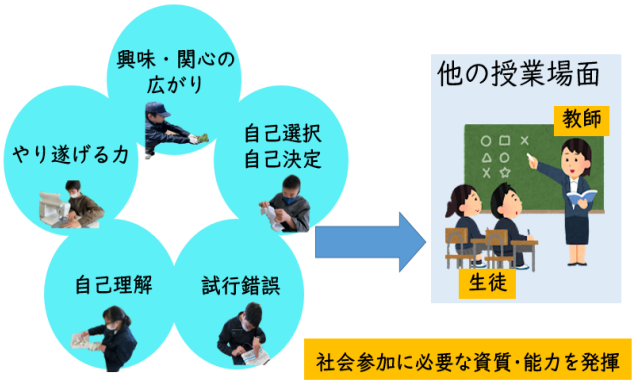


図３　来年度の実践について

高等部の授業づくり

１　選定した学習の説明

Ｄスタディは令和２年度からスタートした高等部学年縦割りグループによる学習である。Ｄスタディのは，Discovery(発見)，Do（やってみる）の頭文字から取っており，生徒の実態や教育的ニーズを基に，知的好奇心を喚起しながら，問題発見・問題解決型の学習を行い，生徒の「生涯学習力」を高めることを目指している。

２　内容

（１）「Ｄスタディで高まるであろう生涯学習力」の検討

高等部ではＤスタディを研究の対象授業とし，年度当初，育成を目指す資質・能力の３つの柱を基に，各学習グループで「Ｄスタディで育てたい力」を設定し，それらを集約し「Ｄスタディで高まるであろう生涯学習力」を設定した。「Ｄスタディで高まるであろう生涯学習力」は，「自己理解」「実行力」「情報活用力」「社会性」「自己選択・自己決定」とした（図１）。

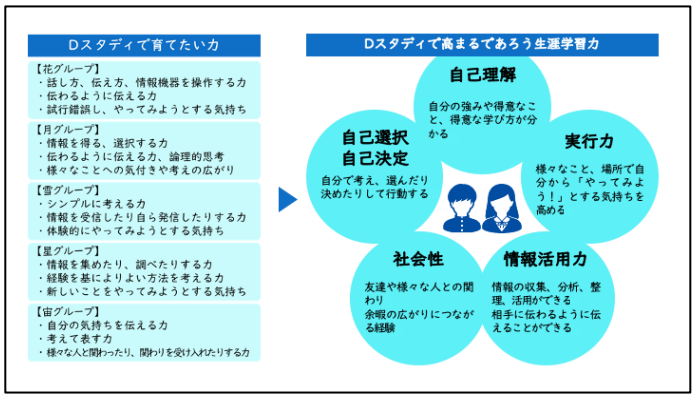


図１　「Ｄスタディで高まるであろう生涯学習力」

（２）生涯学習力を高めるための授業づくり

①エピソード記録を活用した学部カンファレンス

抽出生徒の学部カンファレンスを行い，３つの点について意見を出し合った（図２）。

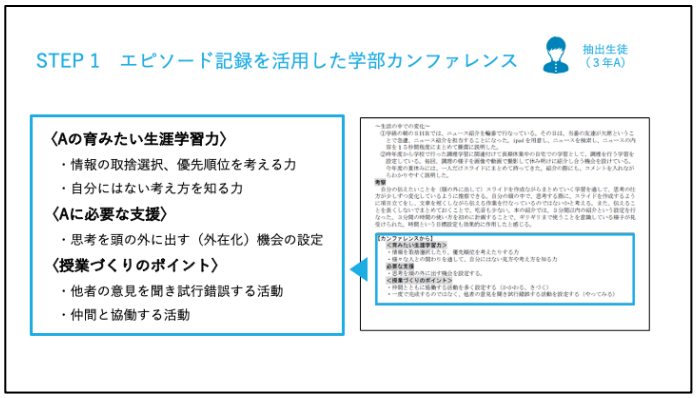


図２　カンファレンスの内容につい

②学部カンファレンスを生かした授業づくり

学部カンファレンスの内容を生かして授業づくりに取り組んだ。検証授業はＤスタディ花グループ「通町商店街のＣＭを制作しよう～相手に伝わる動画制作とは～」である。花グループは，３年生男子４名の学習グループであり，全員，一般就労を希望している。本単元における授業づくりの具体的なポイントは図３のとおりである。また，学習指導案の単元設定の理由，生徒のねらいや手立ての文末に「Ｄスタディで高まるであろう生涯学習力」のキーワードを記載し，授業者，参観者が生涯学習力を高めるための授業づくりの共通の視点をもって検証した。本単元の実践を通して，様々な人の考えを受け入れ，よりよいものにしようとする気持ち【社会性，自己理解，実行力】を高めることにつながる実践を行うことができた。

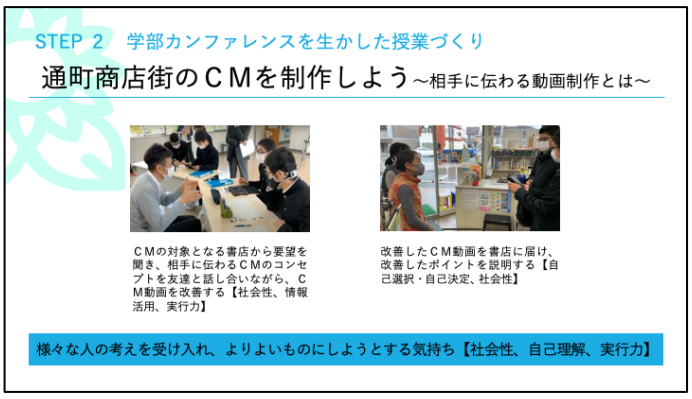


図３　授業づくりについて

③授業研究会の実施

本学准教授，谷村佳則先生をお招きした授業研究会では，「動画編集における自分の強みや得意なことを生かしながら友達や教師，地域の方など，様々な人（他者）の気持ちを受け入れて動画を改善するということは，自分の考えや気持ちを調整する「自己調整」する力が求められていた。また,様々な人（他者）とのやり取りの中で，自分の強みや得意なことを相手や状況に合わせてどのように使うかを考える，自己理解を深めるきっかけになっていた。さらに，この学びの成果を『般化』し，他の学習や普段の生活の中で生かすことが大切である。学びの成果の積み重ねが問題解決に向けて進んでいく生徒の原動力となる。」といった助言をいただいた。

３　今後に向けて

（１）「Ｄスタディで育てたい力」，「Ｄスタディで高まるであろう生涯学習力」の見直し

改めて各グループで資質能力の３つの柱を基に「Ｄスタディで育てたい力」の見直しを行った。どの学習グループも「学びに向かう力，人間性等の涵(かん)養」の内容と「自己理解」を関連付けることができた。これらのことを踏まえ「生涯学習力につながる『Ｄスタディ』で大切なこと」を完成させた（図４）。

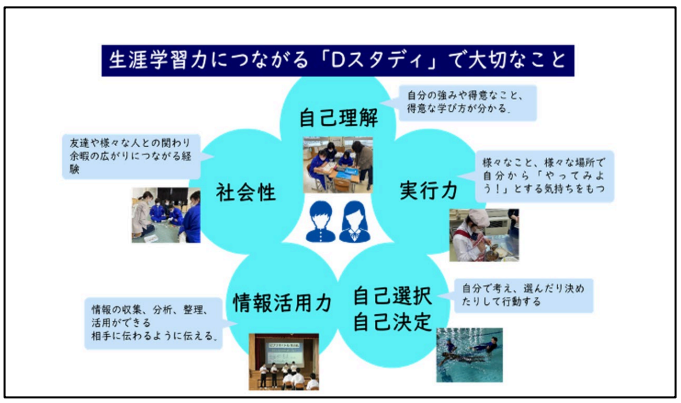


図４　「生涯学習力」につながる「Ｄスタディ」で大切なこと

（２）公開研究協議会意見交換会から

公開研究協議会，意見交換会では「卒業 後の学びに接続する生徒の自己理解を深める実践」のテーマの下，参加者からの実践を紹介していただきながら意見交換を行った。

以下意見交換会からの抜粋（図５）

- 他学部での作業学習体験を通して，自分が得意だと思っていたことがまだ力不足だということに気付き，改めて目標を設定する姿が見られた。
- ＩＣＴ機器を活用し，自分の取組を俯瞰して捉え，客観的に振り返ることで自己理解が高まる。
- 在学中から，福祉，行政等と連携し，学びを接続していくような取組が必要である。

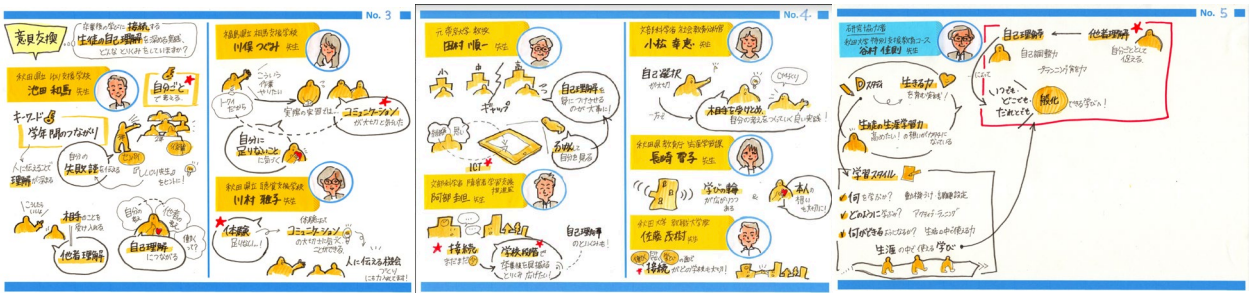


図５　意見交換の記録

今年度の実践から，高等部では自己理解を「自分の強みや得意なこと，得意な学び方が分かる」と定義した。高等部段階で自己理解を深めることは，学習指導要領で示されている「学びに向かう力，人間性等の涵(かん)養」と同様に，生徒の「生涯学習力」を高める上で，他の要素と関連させて働かせていくべき重要な要素であると考える。高等部卒業後，社会の中でよりよく生きていくためには，在学中に身に付けた力を様々な場面で般化し，生活の中で生かしていくことが必要である。自分の強みや得意なことが分かっていれば，学校を離れても様々な場面で安定的に再生・実行することができるのではないかと考える。また，得意な学び方が分かっていれば，自分から新たな学びに取り組み，新たな力を獲得していくことができるのではないかと考える。次年度も今年度の成果を生かし，生徒の「生涯学習力」を高められるように実践を重ねていきたい。

第４章　研究のまとめ

研究のまとめ

1　児童生徒一人一人の「生涯学習力」の高まりに向けて

「生涯学習」とは，一般には人々が生涯に行うあらゆる学習，すなわち，学校教育，家庭教育，社会教育，文化活動，スポーツ活動，レクリエーション活動，ボランティア活動，企業内教育，趣味など様々な場や機会において行う学習の意味で用いられている（文部科学省：2018）。生涯学習の内容や場所，機会などは，非常に多岐にわたる。そのため，教師一人一人が生涯学習の解釈や学習のねらいの捉えが異なると効果的な学習の積み重ねは難しいと考える。そこで，本研究では「生涯学習力」の具体化を図り，授業づくりの共通の視点として活用した。教師の共通の視点として各学部で出した「生涯学習力」を高めるために大切にしていることは，おおむね学習指導要領で示された「学びに向かう力，人間性等」の涵養に関わる内容である。菅野（2021）は，生涯学習を支援する上で，目指すこととして「態度を育てる」と話した。本校でも同様に，この変化の激しい新しい時代であるからこそ，習得した事柄を働かせていく力と言われる「学びに向かう意欲や態度」を全校体制で育てようとしている（図１）。

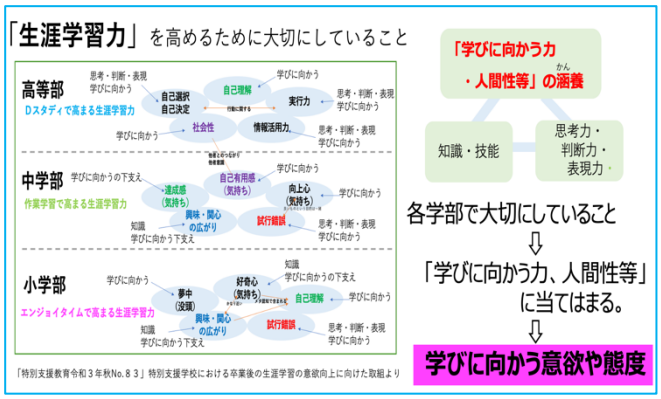


図１　各学部の「生涯学習力」を高めるため大切にすること

また，向野（2022）は，「子どもたちが学校での具体的な学びを通して「学ぶ喜び」を数多く経験させることができたかによって，児童生徒がその後の生涯を通して学び続ける力の獲得につながっている」と話しているように，今年度の実践を授業づくりの側面から見ると，「生涯学習力を高めるために大切にしていくこと」は，教師の共通の視点であり，授業づくりのねらいに当たるものである。オリジナルマップは，節目ごとに学習の履歴や児童生徒の思いを教師との対話を通して確認し，「なぜ，何のためにこの学習をするのか」という学習への目的や動機付けになる。学習のまとめに再度用いることでも，自分の学習の積み重ねや好きな場所や事柄が分かり，次の学びに向かう意欲へとつながる。地域の方との関わりや生の声を聞く機会は非常に有意義なものであり，学習の中では，学習の目的に合わせて，学習の動機付けや地域の方と学ぶ楽しさを味わうことができる。また，単元終了後の地域の方との振り返りなどの対話を大切にすることが重要になる（図２）。このように，３つのＷＧともに「学びの意欲や態度を育てる」ことに直結した実践となっていたこと分かる。

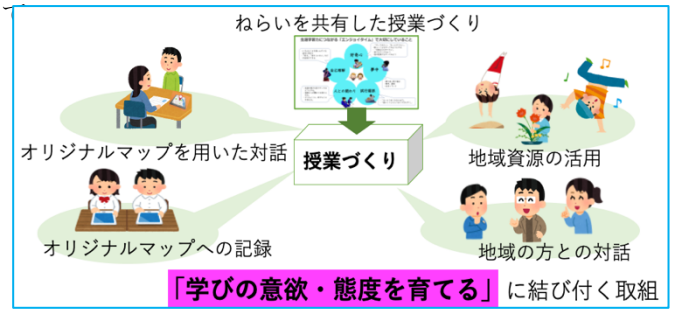


図２　授業の側面から見た各ＷＧの取組

2　成果と今後に向けて

（１）成果

①「生涯学習力」を高めるための授業づくりの基盤整備

児童生徒一人一人の「生涯学習力」を高めることを目的に，「生涯学習力」を高めるための授業づくりの基盤整備を全校体制で検討することができた。生涯学習という視点から学習の中で大切にしていることを導き出し，「生涯学習力」を意識し目標を明確に設定し，児童生徒の「生涯学習力」の変容を見取ることができた。オリジナルマップや地域資源の活用は，どのように学ぶかという学習過程に関わるものである。また，学部を超えたＷＧを組織し，学部の授業づくりとの往還的な体制で研究推進を図ってきたことで，児童生徒の将来を見通しながら「生涯学習力」を高めるための学習内容を検討することができた（図３）。加えて，教師の「生涯学習力」を意識した意図的な授業づくりを行ったことで，児童生徒

の興味・関心の広がりや深まり，仲間との協働の中で自分の得意な作業を見付けたり，責任をもって最後まで作業をやり遂げたり，他者のアドバイスを受け入れて問題を発見し，解決したりと，児童生徒の「生涯学習力」に結び付く変容を見取ることができた。

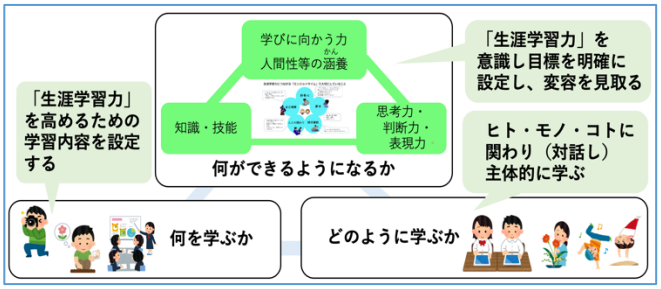


図３　授業づくりの基盤

②ゆるやかなネットワークを構築するための対話

学習の目的の達成に向けて，これまでは，学校から一方的に地域資源活用を依頼することが多かったが，双方にメリットのある形を築いていくことでより持続可能な関係性が構築できる。そして，地域の方々が互いの活動内容を知り，地域の方同士が結び付くことで新たな可能性が生まれる。また，授業での関わりだけではなく，生涯学習を推進するという教育方針の共有や学部を超えた授業づくりの関わりなど，つながりを太くし，対話を増やすことで，ゆるやかなネットワークの構築になると考える（図４）。

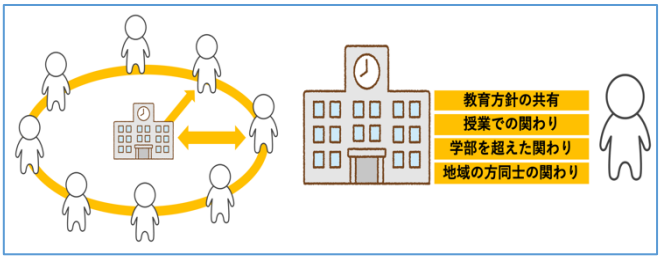


図４　ゆるやかなネットワークの構築に向けて

（２）今後に向けて

①「生涯学習力」を高める授業づくりを積み重ね

今後も，引き続き単元や学年，学部において「生涯学習力」を高める授業づくりを積み重ねる。全校体制での積み重ねを通して，今年度とは対象の学習が変わったり，学習グループの児童生徒が入れ替わったりした際に，学習の中で出した「生涯学習力」を高めるために大切にすることは同一なのか，それとも異なってくるものなのかは検討していく余地がある。

また，「生涯学習力」を高めるために大切にすることを意識し，年間指導計画や単元計画を作成し，指導の形態相互の関係性も検討していく必要がある。

堤（2019）は，子どもの学びについて，モノ・ヒト・コトとの出会いと対話を通して，主体的に自らの世界を拡げ深めていくことと定義することができると言っているように，単元や年間を通して，児童生徒自身の世界の広がりや深まり，つまりは，変容の見取りを継続して行う必要がある。加えて，より効果的な見取り方や目標と評価の整合性を高めていきたい。

本校における「生涯学習力」を高める研究は，今年度で３年目を迎える。「生涯学習力」を高めるための学びを体験した卒業生の現在の様子を把握し，教育課程や授業改善に生かしていきたい。

②地域や家庭との対話や情報発信

地域の方の声を生かした授業づくりや，地域を舞台とした学習，学習の成果を地域で発揮する機会の創出，そして，学習の後の振り返りなどを丁寧に行うことで，社会への発信の一つになると考える。

物理的な距離や接触等に配慮が必要な世の中であるものの，今年度の本校の取り組みに関しては，過年度に比べ，地域との関わりの回数の増加や内容の充実が顕著に認められる。このような状況下であっても，地域との関わり方を工夫し，児童生徒の学びを止めない努力を継続して行っていく。

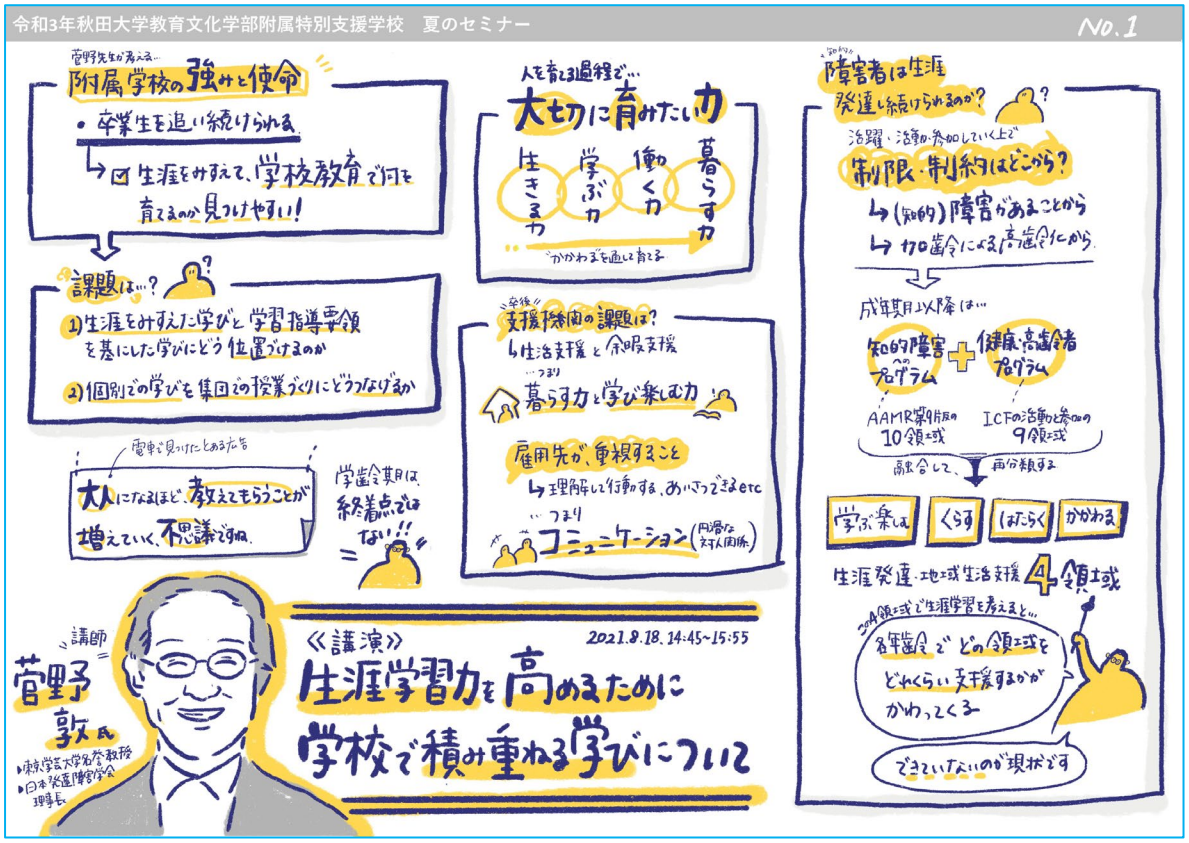
最後に，生涯にわたり学び続けるためには家庭の理解や協力は大きな要素と考える。保護者の方にも閲覧できる生涯学習の情報や，生涯学習の意義等を伝えたり，共有したりする機会も創出していきたいと考える。

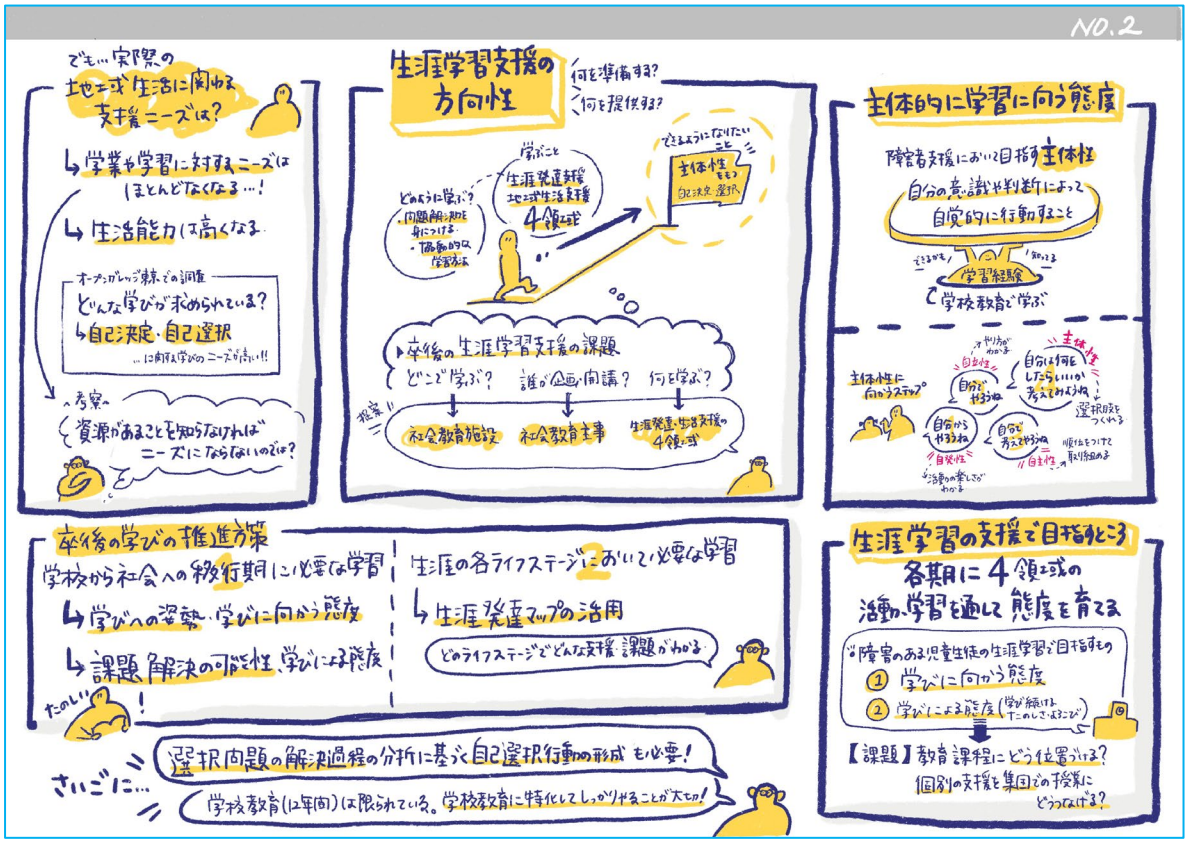
このような実践を全校体制で継続的に行っていくことで，生涯にわたり学び続けるための要素に結び付き，引いては児童生徒一人一人の「生涯学習力」の高まりに結び付くものだと考える。

夏のセミナー　(R3. 8. 18) の記録

講演講師　東京学芸大学　名誉教授　菅野　敦　様

演題　「生涯学習力」を高めるために学校で積み重ねる学びについて

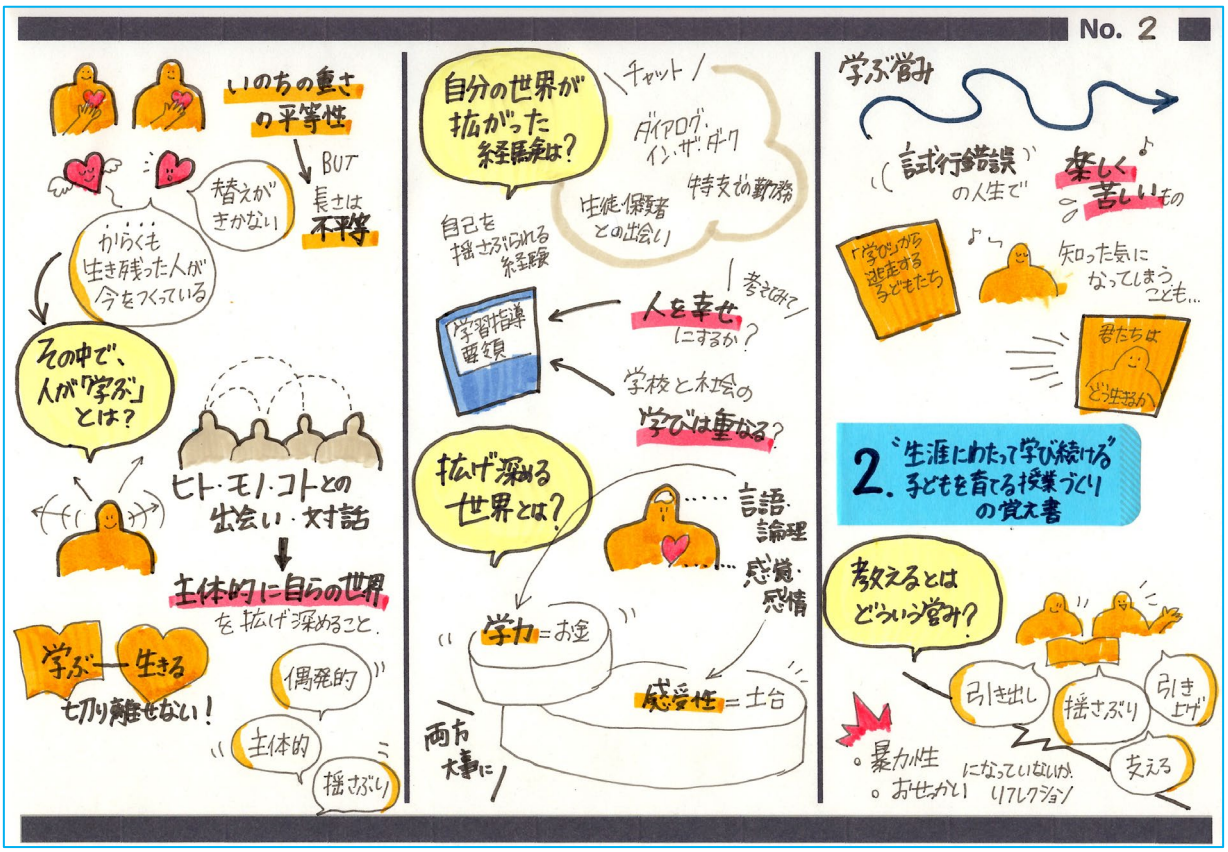


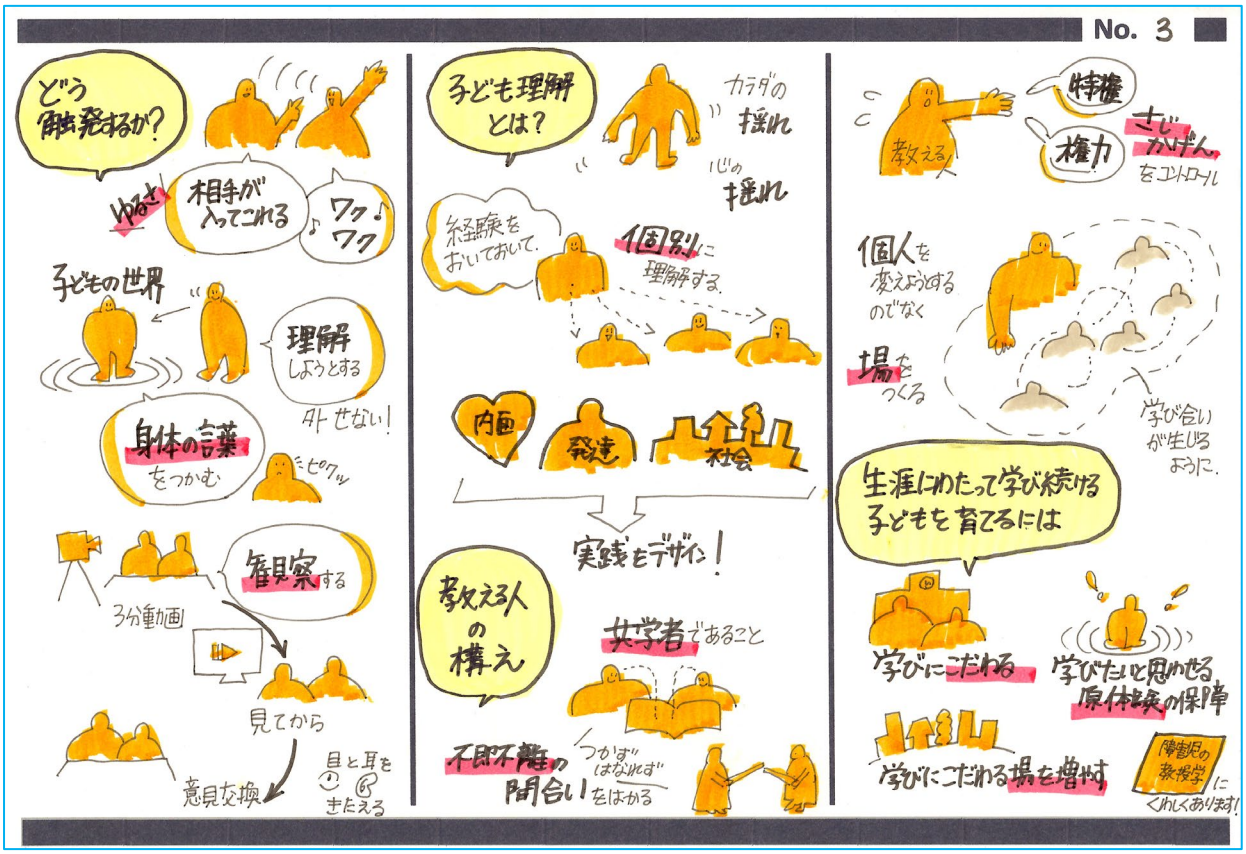


公開研究協議会　(R4.1.29)の記録

講演講師　都留文科大学　准教授　堤　英俊　様

演題　生涯にわたって学び続ける子どもを育てる授業づくり




No. 3
どう触発するか?
ゆるさ
相手が入ってこれる
ワク♪ワク
子どもの世界
理解しようとする
身体の言葉をつかむ
ピクッ
観察する
3分動画
見てから
意見交換
目と耳をきたえる
子ども理解とは?
カラダの揺れ
心の揺れ
経験をおいておいて.
個別に理解する.
内面
発達
社会
実践をデザイン!
教える人の構え
共学者であること
不即不離の間合いをはかる
つかず はなれず
教える人
特権
権力
さじかげん をコントロール
個人を変えようとするのでなく
場をつくる
学び合いが生じるように.
生涯にわたって学び続ける子どもを育てるには
学びにこだわる
学びたいと思わせる原体験の保障
学びにこだわる場を増やす
障害児の教授学にくわしくあります!

学びは続くよ
どこまでも…

【引用・参考文献】

（１）秋田大学教育文化学部附属特別支援学校 「ひと・地域・未来をつなぐ」研究紀要第 41・42・43 集，2015・2016・2017
（２）秋田大学教育文化学部附属特別支援学校 「本人主体の個別の教育支援計画（私の応援計画）を活用した教育課程の編成」研究紀要第 44・45 集，2018・2019
（３）秋田大学教育文化学部附属特別支援学校 「児童生徒の『生涯学習力』を高める教育課程の編成」研究紀要第 46・47 集，2020・2021
（４）亀井浩明（1998）「生きる力と生涯学習」財団法人全日本社会教育連合会
（５）菊地一文（2021）「知的障害教育における学びをつなぐキャリアデザイン-本人の思いや願いを踏まえた深い学びの実現に向けて-」ジアース教育新社
（６）木村素子（2020）「10 年後の子どもに必要な見えない学力の育て方」
（７）工藤勇一・青砥瑞人（2021）「自律する子の育て方」ＳＢ新書
（８）佐藤一子「生涯学習と社会参加　おとなが学ぶことの意味」東京大学出版社
（９）障害児の教授学研究会・堤他（2019）「アクティブラーニング時代の実践をひらく障害児の教授学」福村出版
(10) 全日本特別支援教育研究連盟・向野他（2022）「特別支援教育研究」No.769，02～05
(11) 髙橋基裕・藤井慶博（2020）「当事者主体の個別の教育支援計画の実践とその効果に関する研究」発達障害研究
(12) 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（2018）「障害者の生涯学習活動に関する実態調査」平成 29 年度文部科学省委託事業「生涯学習施策に関する調査研究」
(13) 内閣府（2020）「障害者基本計画」
(14) 文部科学省（1981）「生涯教育について（答申）」中央教育審議会
(15) 文部科学省（2010）「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」
(16) 文部科学省（2010）「特別支援教育の在り方に関する特別委員会　論点整理」
(17) 文部科学省（2012）「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進〈報告〉」
(18) 文部科学省（2012）「障がいのある学生の修学支援に関する検討会報告（第一次まとめ）」
(19) 文部科学省（2016）「教育課程企画特別部会　論点整理」
(20) 文部科学省（2016）「個別の指導計画」と「個別の教育支援計画」について
(21) 文部科学省（2017）「特別支援学校学習指導要領解説　各教科等編（小学部・中学部）」
(22) 文部科学省（2017）「特別支援学校学習指導要領解説　自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）」
(23) 文部科学省（2017）「特別支援学校学習指導要領解説　総則編（幼稚部・小学部・中学部）」
(24) 文部科学省（2017）「特別支援学校幼稚部教育要領　小学部・中学部学習指導要領」
(25) 文部科学省（2018）「学校卒業後における障害者の学びの推進方策について（論点整理）」
(26) 文部科学省（2018）「障害者の生涯を通じた多様な学習活動の充実について」
(27) 文部科学省（2018）「新時代の学びを支える先端技術活用推進方策（最終まとめ）」
(28) 文部科学省（2018）「第３期教育振興基本計画」
(29) 文部科学省（2019）「障害者活躍推進プラン～障害のある人の力を生かして未来を切り開くために必要な５つの政策プラン～」
(30) 文部科学省（2019）「障害者の生涯学習の推進方策について（通知）」
(31) 文部科学省（2019）「障害者の生涯学習の推進方策について―誰もが，障害の有無にかかわらず共に学び，生きる共生社会を目指して―（報告）」
(32) 文部科学省（2019）「特別支援学校高等部学習指導要領」
(33) 文部科学省（2021）「特別支援教育」No.82・No.83

あ　と　が　き

本校では，「新しい時代で学び続ける児童生徒を育てる」という研究テーマを掲げ，子どもたちの「いま」と「これから」をつなぎ，一人一人が自分らしく豊かな生活を送ることができるよう実践に取り組んでまいりました。

これまでも本校は，子ども主体の「私の応援計画」を活用し，「子どもの思いや願い」を大切にしてきました。「こんなことを学んでみたい」「あんなふうになりたい」，そのような「思いや願い」を一人一人がもてるよう，各学部において子どもの内面の成長を大切にしながら，「働く」「暮らす」「楽しむ」という視点も盛り込み実践を重ねてきています。

一人一人の生き方やその人らしさを考えたとき，それらは実に多様です。私たちが決めつけ狭めてしまってはなりません。「いま」の学びが未来や豊かな生活へ確かにつながっているのか，そのことを常に念頭に置きながら取り組んでいくことが肝要です。学び続けるためにはどのようなことが大切なのか，子どもたちの学びの意欲につながる関わりや教育活動となっているのか，この研究を進めていく中で「生涯学習力」について学びを深め，職員間で共通理解することができました。今年度の研究を通して確認できた「意欲や人間性を育む授業づくり」「地域とのつながり」「ICT の活用」について，２年目となる次年度さらに検証していきたいと思います。

新しい時代，変化の激しい時代はなかなか先が見通せず，柔軟な思考や対応，新たな挑戦が求められます。職員も自身の「生涯学習力」を高め，「なぜ学び続けるのか」「何のために学び続けるのか」この大事な問いについて，子どもたちと一緒にそして職員同士で学び合いながら，その意義を共有していきたいと思います。

是非御高覧いただき，本校の取組に対して忌憚のない御意見，御指導をいただけますようお願いいたします。

最後に，本年度の研究推進に対しまして御指導をいただきました東京学芸大学名誉教授の菅野敦先生，都留文科大学准教授の堤英俊先生，秋田大学教育文化学部の先生方に心より感謝申し上げます。

副校長　松井智子

研　究　同　人　（2021年度）

校長	藤井　慶博	教諭	今野　文龍
副校長	松井　智子	教諭	森田　紗也子
教頭	相場　力	教諭	佐藤　美里
主幹教諭	櫻田　佳枝	教諭	信田　智華子
教諭	目黒　晃子	教諭	樋渡　実由梨
教諭	伊藤　学	教諭	伊岡森　真由
教諭	鈴木　暢子	教諭	武田　茜
教諭	菊地　雄平	教諭	菅原　美智
教諭	本多　勝成	教諭	田中　智佳
教諭	黒木　良介	教諭	佐々木　蓮
教諭	下村　光行	養護教諭	佐藤　麻衣子
教諭	髙橋　浩樹	教育系スタッフ	田村　千賀子
教諭	後松　慎太郎	教育系スタッフ	樫尾　康子
教諭	相原　淳	教育系スタッフ	星川　翔矢
教諭	斎藤　明	教育系スタッフ	今　七海
教諭	石成　舞	教育系スタッフ	加賀谷　葵
教諭	今井　彩	教育系スタッフ	佐藤　茅奈美
教諭	松尾　佑美		

研究協力者（秋田大学）

武　田　　篤
原　　義　彦
谷　村　佳　則
前　原　和　明
鈴　木　　徹

秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要　第44号別冊
附属特別支援学校・令和３年度研究紀要　第48集

印刷・発行　令和４年３月
発　　行　秋田大学教育文化学部附属特別支援学校
〒010-0904　秋田市保戸野原の町７－７５
TEL　０１８－８６２－８５８３
FAX　０１８－８６２－８５２５
ＨＰ　http://www.sh.akita-u.ac.jp
Mail　fuyo@sh.akita-u.ac.jp